

# 年表・海外における日本研究

① (1~1867)

《Studies of Japan by Foreigners; a Chronological Table (1~1867)》

藤津滋生編

## 《凡例》

\* 本年表は1991年に私家版で出版したものの訂正・追加版である。

1. 日本研究についての著作、翻訳などの重要な文献を年代を追って掲げた。
2. なるべく著作の日本語名を先にし、その原書名を続けて記入した。不明なものはどちらかにした。ロシア語の書名は日本語翻訳名にし、著者名は翻字した。
3. 右欄にあげた関連事項としては、日本関係の著作のある者および日本研究上有名な者の来日年を記入した。また、対外交渉史は日本研究の重要な一側面として努めて収録した。世界史上のトピックスもなるべく収録した。日本人による蘭学の代表的な著作も収録した。
4. 同一年内の収載順は、左欄は著者のABC順  
右欄は来日人名のABC順およびその他の関連事項とした。
5. 参考文献によって、著書の発行年、来日人名の来日年や生没年が違っているものがかなり見受けられた。この場合は主として、『岩波西洋人名辞典 増補版』(岩波書店 1981)を基準とし、人名、地名、国名は流布されている通用語に統一した。例えば、イスパニア、エスパニャはスペインに統一した。
6. 未完の著作は、成稿年の明らかなものは当該年の欄に記入した。不明のものは「？」や「(この頃)」で表した。
7. 著書で分冊や多数巻のものは、最初の巻が出た年に記入し、完成年を「(〜)」のように記入した。

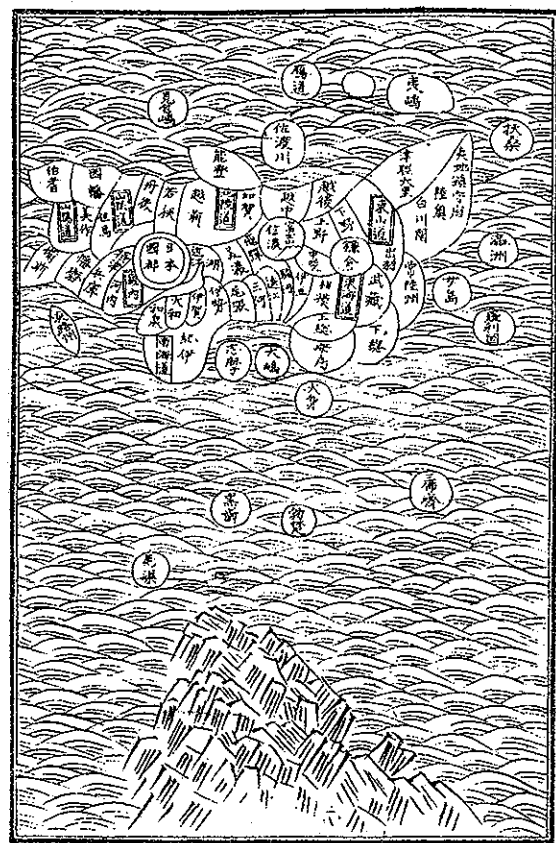
年代	日本研究の歩み	関連事項
1	*「倭」、「倭人」という命名が公認されたのは紀元前後頃 *漢字導入は紀元前後頃 *『漢書』、『地理志』に前1世紀半ば頃、倭国は百余国に分かれ、前漢に朝貢する記事あり	
25	後漢 25～220	
57	*『後漢書』、『東夷伝』に倭奴国王が後漢に使者を送り光武帝から金印「漢委奴国王」と紫綬を賜った記事あり(107年にも記事あり)	
67		*仏教、中国に伝わる
105		*後漢の宦官、蔡倫、樹皮・麻頭・魚網を使って紙を作る
166		*ローマ帝国、中国に使者派遣
220	三国時代(魏・蜀・呉) 220～280	
226	ササン朝ペルシャ	
239	*『魏志』、『倭人伝』に倭の女王卑弥呼が初めて魏に使者を送り、明帝から「親魏倭王」の称号と金印紫綬を賜った記事あり(240、243、245、247年にも使者を送る)	
240	*『魏志』、『倭人伝』に魏、倭国へ初遣使の記事あり	
285		*百済の王仁来日。『論語』、『千字文』将来
4世紀	高句麗・百済・新羅の三国鼎立	
391	*『広開土王碑銘(好太王碑)』に倭軍が海を渡って百済・新羅を服属する記事あり。(碑文が改竄されていたことが判明)	
399		*法顕、インドに向かう
439	中国・南北朝時代 439～589	
476		*西ローマ帝国滅亡
5世紀	*『宋書』、『倭国伝』に倭五王(讃、珍、済、興、武)の遣使についての記事あり(421、425、443、451、462、478年にも記事あり)	
513		* (この頃)百済が五経博士を送る
538		* 仏教伝来(異説あり)
540	* (この頃)中国梁の『職貢図』に倭人の使者が描かれる。現存する最古の日本人画像	
581	隋時代 581～618	
592	飛鳥時代 592～645	
6～7世紀		* 遣隋使派遣
604		* 十七条憲法制定
605	*『隋書』、『流求国伝』に隋の煬帝の遣わした海師何蛮が流求(琉球)に到着する記事あり	
607	*『隋書』、『倭国伝』に、国書に「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙無きや」とあり、煬帝の不興を買う(600、608年にも記事あり)	
618	唐時代 618～907	
629		* 玄奘三蔵、西域よりインドへ出発(～645)。後「大唐西域記」(弁機編)を著す
630～		* 遣唐使派遣(～894)
635		* キリスト教の一派「景教」唐に伝わる
643		* 王玄策、インドへ派遣される(647、658にも)
645		* 大化改新
663	* 白村江の戦い(唐・新羅連合軍、百済を滅ぼす)により、百済の文化人の多くが渡来し、のち日本文化に大きな貢献をした	
665	*『旧唐書』、『日本国伝』から倭国を日本と改める(倭国も併用)	

年代	日本研究の歩み	関連事項
671		*唐の義浄、インドへ出発(～695)
672		*壬申の乱
676	統一新羅	
701		*大宝律令が施行され、律令国家となる
710	奈良時代 710～784	*唐の長安城などをモデルにして平城京が完成
712		*『古事記』成る
720		*『日本書紀』成る
727	*渤海の国使来日(計35回)	
728		*渤海使への答使を出す(計13回)
752		*東大寺、大仏建立
754		*唐僧、鑑真とその弟子24人来朝
784	平安時代 784～1185	
794		*平安京遷都
816		*空海、高野山を開創
838		*僧円仁、入唐(～848)日記『入唐求法巡礼行記』を著す
868		*唐で『金剛経』板行(最古の印刷書)
918	高麗時代 918～1392	
960	宋時代・北宋 960～1127	
	*『宋史』、『日本伝』に、唐代までに知られた日本の地理、日中関係の大要、神代から第64代円融天皇まで及び五畿七道三島が初めて紹介される	
962	神聖ローマ帝国成立(～1806)	
984		*日本僧、裔然入宋。彼のもたらした『王年代記』が『新唐書』、『東夷伝・日本』に利用された
1019		*沿海州の刀伊の軍勢、対馬・芯岐、北九州に襲来(撃退)(刀伊の入寇)
1041～		* (~48) 中国、畢昇、活字印刷を始める
1066	ノルマン王朝時代 1066～1154	
1072		*成尋入宋。日記『参天台五台山記』を著す
1096	第一回十字軍 1096～1270(第1回)	
1127	宋時代・南宋 1127～1279	
12世紀		*オックスフォード大学創設
		*少し遅れてケンブリッジ大学創設
1145	*『三国史記』成立。古代倭、日本関係記事あり	
1180	鎌倉時代 1180～1333	
1209		*フランチェスコ修道会創立
1215		*マグナ・カルタ(大憲章)
		*ドミニコ修道会創立(1216年公認)
1219		*チンギス・ハーンの西征(～1244)
1241		*ハンザ同盟
1245		*ローマ法王の使者ジョヴァンニ・デ・プラノ・カルピーニ、蒙古へ派遣される(～47)
1251	*羅大経(中国南宋)『鶴林玉露』の「日本国僧」の項に十数語の日本語を中国字音で注したものが見られる	
1253	*フランシスコ会修士リュブリュキ(ルブルクとも Rubruquis, Guillaume 1220頃～1293)蒙古に赴く。帰国後の『旅行記 Itinerarium fratris William de Rubruquis de ordine fratrum minorum』に日本を「不老国」として紹介する日本関連記事あり。西欧人に	

年代	日本研究の歩み	関連事項
1260	よる最初の日本紹介	*フビライ(世祖)即位(~1294)
1271	元時代 1271~1368 *【元史】、「日本伝」に日元交渉の発端から文永、弘安の役のことを簡略に述べる記事あり	*マルコ・ポーロ、東方旅行へ出発(~95)
1274		*元・高麗連合軍、日本に襲来(文永の役)
1281		*元・高麗連合軍、日本に再襲来(弘安の役)
1284	*【この頃】一然【三国遺事】編纂。古代倭、日本関係記事あり	
1298?	*イタリア人マルコ・ポーロ(Marco Polo 1254~1324)【東方見聞録】成る。日本を「ジバング」(Zipung, Zipungu)として紹介し、西欧人の日本に対する夢をかきたてる。独(1477)、ラテン、伊(1496)、ポルトガル、西(1518)、仏(1556)、英(1579)、オランダ(1563)の各語に訳され広く読まれた	
1305	*【行基図】。年代の明らかな現存する最古の書写(仁和寺所蔵)	
1337	百年戦争 1337~1453	
1368	明時代 1368~1644	
14世紀中		*明・高麗、倭寇に悩まされる(~16世紀中)
1389	*琉球と朝鮮との交渉始まる	
1392	室町時代 1392~1573 李朝時代 1392~1910 *【李朝実録】に、日朝関係記事、および琉球からの遣使の記事あり(~1592)	
1401		*足利義満、明に使者を送り、国交回復
1403		*朝鮮、銅活字印刷始まる(癸未字)
1404		*足利義満、李朝へ使者を送り、国交回復 *明との勘合符貿易始まる(~1547)
1415	*琉球、日本と正式に通交	*イギリス軍がフランス軍を破る(3年戦争)
1419		*朝鮮軍、倭寇への報復に村島島を攻撃
1420	*宗希環(朝鮮1376~1446)報聘使として来日。後「老松堂日本行録」著す。15世紀日本風俗を活写。朝鮮人の手になる最古の漢詩を主とした日本紀行録(1800年木活字にて開刊)	
1422		*【この頃】イギリス初代の印刷家ウィリアム・カックストン生まれる(1491年没)
1423		*朝鮮、乃而浦・富山浦に倭館を設置
1428		*初めての朝鮮通信使来日
1429	尚巴志、琉球王国樹立	
1432		*足利義教、明との勘合符貿易を復活(宣徳要約の締結)
1443		*朝鮮、世宗王、諺文(ハングル)を作る *申叔舟(1417~1475)、朝鮮通信使の書状官として来日
1450?		*グーテンベルク(Gutenberg, Johannes 1398頃~1468)活字印刷始まる
1451	*【高麗史】成立。日本・高麗交渉史研究には不可欠の史料	
1452	*【高麗史節要】成立。日本・高麗交渉史関係の記事あり	
1453	ルネッサンス 1453~1517	*東ローマ帝国滅亡
1455?		*グーテンベルク【42行聖書】(マザラン版刊)
1471	*申叔舟【海東諸国紀】を著す。日本に使いをした時の見聞を参考にして、地勢図を描き、諸家世系の由来や風俗及び使者を礼節する規定を略述。「日本国紀」、「琉球国紀」、「朝聘応接紀」の3部。日本(琉球)地	

年代	日本研究の歩み	関連事項
1479	図6枚と朝鮮三浦地図3葉付き	*スペイン王国成立
1488		*ポルトガル人、バルトロメオ・ディアス、南アフリカ航海、喜望峯に到着
1491	戦国時代 1491~1568	
1492	*『伊路波』李朝の対日交渉の必要から編集された日本語教科書	*コロンブス(Columbus, Christophorus 1451~1506)アメリカ大陸発見
1494		*トルデシーヤス条約
1496	*マルコ・ポーロ『東方見聞録 Finisse lo libro de Marco Polo da Venie』(伊語訳 ベェネチア刊)	
1497		*イタリアの航海者アメリゴ・ヴェスプッチ、新大陸探検
1498		*ポルトガル人ガマ(Gama, Vasco da ? ~1524)インド航路を発見。西洋人の東洋への進出の端緒が開かれる
1509		*エラスムス『愚神礼賛』刊
1510		*ポルトガル、ゴア占領
1511		*ポルトガル、マラッカ占領

申叔舟「海東諸国紀」(1471)の日本国図



松下秀明『異称日本伝』より

年代	日本研究の歩み	関連事項
1513		*スペインの探検家ヴァスコ・バルボア、パナマ地峡を横断し初めて太平洋に出る
1514	*ピレス(Pires, Thomé)“The Suma Oriental”刊。文中に出てくるポルトガル語の‘Jampon’が英語の‘Japan’の由来と言われる	
1516		*エラスムス訳・編『新約聖書』(ギリシャ語)刊
1517	宗教改革と三十年戦争 1517～1648	*ポルトガルの広東進出
1518	*マルコ・ポーロ『東方見聞録 Cosmographia brevis introductoria en el libro de Marco Paulo』(西語訳 セビリア刊)	
1519		*ポルトガル人マゼラン、世界周航に出帆(～22) *スペイン人、コルテスのメキシコ征服始まる(～21)。
1520		*ルター「ドイツ国民たるキリスト教貴族に告ぐ」他刊
1523?	*薛俊(中国明朝)『日本考略』。日本の沿革、境界、州郡、風俗、山川、特産等の紹介書。また「寄語略」に日本語単語350余語集める。中国人最初の日本研究専門家といわれるが、内容の大部分は先の「倭人伝」、「倭国伝」を整理、分類したもの。地図付き	
1526		*ムガル帝国成立
1530		*コレージュ・ド・フランス創設
1531		*フランシスコ・ピサロとアルマグロがペルーに到り、インカ帝国征服始まる(～33)
1533	イワン4世(雷帝)即位	*スペイン人、インカ帝国を滅ぼす
1534		*スペイン人イグナチウス・デ・ロヨラ(Ignatius de Loyola 1491頃～1556)ら7名パリにてイエズス会創立(1540年公認)
1541		*ポルトガル人、豊後に漂着。(ヨーロッパ人渡来の最初)
1543		*ポルトガル船、種子島に漂着し鉄砲を伝える *ポーランド人コペルニクス、地動説を発表
1544?		*ピント(Pinto, Fernão Mendes 1509?～1583)ポルトガル人来日(日本紹介者)。以後、1546、1551、1556年にも来日したといわれる
1547	*アルバレス(Alvares, Jorge)、ザビエルの依頼により日本に関する報告書提出。ヨーロッパ人による日本に関する最初の報告書	*ザビエル、マラッカにて日本人アンジローから日本事情を聴取
1548	*ランチロット(Lancilloto, Nicolao)、日本人アンジローの助けにより『日本情報』をまとめザビエルの手を経てインド総督に提出	
1549	* (中国明朝)『華夷訳語・日本館訳語』中国語と近隣諸言語との対話語彙集。通交上必要な日本語566語を収める(1382年編集始まる)	*イエズス会宣教師フランシスコ・ザビエル(Xavier, Francisco de 1506～1552)スペイン人、鹿児島に上陸。キリスト教(カトリック)の布教を開始
1550		*ポルトガル船、初めて平戸に入港
1551	*ダ・シルヴァ(Da Silva, Duarte)の『日本文典 Arte da Lingoa Japonesa』この頃著作される。キリシタン宣教師による最初の日本文法書	*ザビエル、大分から出帆
1552		*ザビエル、中国の上川島(広東付近)にて没(47歳)
1556	*マルコ・ポーロ『東方見聞録 La description géographique des provinces & villes plus fameuses de l'Inde Orientale,』(仏語訳 パリ刊)	*アルメイダ(Almeida, Luis de 1525～1583)ポルトガル人、初めて洋式医療を行う(イエズス会宣教師)

年代	日本研究の歩み	関連事項
1557		*ポルトガル人、マカオの居住権獲得
1558	エリザベス1世即位 1558~1603	
1559		*大友義親、豊後府内を開港。外国人の貿易を許可
1563	*鄭若會(中国明朝)『籌海図編』(全13巻)海防のための倭寇研究書巻2が日本および中日関係史。後の中国の日本研究に大きな影響を与えた。地図2枚付き	*フロイス(Frois, Luis 1532~1597)ポルトガル人来日(イエズス会宣教師、日本史研究)
1564	*フェルナンデス(Fernandes, João 1525~1567)『日本文典 Grammatica da Lingoa Japonesa』を編むと伝えられる	
1566	*鄭舜功(中国明朝)の『日本一鑑』この頃成立。1556年豊後に派遣された折りの日本事情報告。「寄語欄」が充実し、日本語の単語3401語を集める。地図付き	*ポルトガル人、マカオ市を建設
1567		*ポルトガル船、長崎に来航
1568	安土桃山時代 1568~1582	
1569	* (この頃)キリシタンの総数3万を越すといわれる	*織田信長、フロイスの京都布教を許可 *メルカトル、〈メルカトル投影図法〉による世界地図を作成
1570	*オルテリウス(Ortelius, Abraham 1527~1598)『世界地図帳 Theatrum Orbis terrarum』(アントワープ刊 ~79)。最初の近代的な世界地図帳といわれ、また我が国が西洋地図に現れた最初のもの。約53枚の銅版手描彩色地図	
1571		*スペイン・マニラ市を建設 *長崎開港(マカオからの定航船を迎える)
1572		*カモンイス『ウス・ルジーアダス』刊
1577	*イーデン(Eden, Richard 1521頃~1576)、ウィリス(Willes, Richarde)『東西インド旅行記 The history of trauallye in the West and East Indies.』(ロンドン刊)。イギリスで刊行されたアジアに関する最初の包括的な報告であり、また英語で書かれた日本についての最初の報告。第3部が日本と中国の項。また、日本を意味する英語の'Giapan(Japan)'の最初の用例あり	*ロドリゲス(Rodrigues Tçuzzu, João 1561~1633)ポルトガル人、来日(イエズス会宣教師、日本文化研究)
1579	*イエズス会の伝道者55人、教会数約150、キリシタンの総数10万人内外といわれる *マルコ・ポーロ『東方見聞録 The most noble and famous trauels of Marcus Paulus』(最初の英訳 ロンドン刊)	*ヴァリニャーノ(Valignano, Alessandro 1539~1606)イタリア人来日(イエズス会巡察師、キリシタン版刊行)。1590、98年にも来日
1580	*ヴァリニャーノ、宣教師養成所としてコレジオ、セミナリオ、ノビシアドを建てる	*ロドリゲス、イエズス会に入会 *スペイン、ポルトガルを合併(~1640) *モンテーニュ『随想録』(~1588)刊
1581		*オランダが独立宣言 *ヴァリニャーノ、信長に謁見
1582	桃山時代 1582~1600 *キリシタンの総数15万人	*九州のキリシタン大名、大友宗麟、有馬晴信、大村純忠の三侯、ローマ教皇のもとへ伊藤マンショら4名の少年使節を派遣(天王遣使使節、90年に帰国)。ヴァリニャーノ、インドのコーチンまで引率する *イタリアのイエズス会宣教師リッチ(Ricci, Matteo 1552~1610)マカオに上陸 *本能寺の変、信長没(49歳) *ローマ教皇グレゴリウス13世、暦法改正(グレゴリウス暦の成立)
1583	*フロイス、『日本史』編さんの命を受ける	

年代	日本研究の歩み	関連事項
1584 1585	<p>*ヴァリニャーノ『日本諸事要録 Sumario de las cosas de Japón』筆。ヴァリニャーノによる第一次日本巡察報告書(1594年活字化される)。第二次は1592年筆</p> <p>*フロイス『日本史総論』(『日本史』の冒頭)執筆</p> <p>*フロイス『日欧文化比較』執筆。安土・桃山時代の社会、生活、民俗の歴史を述べる。611箇条におよぶ日本とヨーロッパの風習の相違点を列挙</p>	<p>*スペイン商船、初めて平戸に來航</p> <p>*メンドサ(Mendoza, Juan Gonzales)『シナ大王国志』刊</p> <p>*教皇グレゴリウス13世、イエズス会に日本布教独占権を付与(1600年制限を解除)</p> <p>*天正使節団ローマ着、教皇グレゴリウス13世に拝謁</p>
1586	<p>*キサトゥス(Cysatvm, Renward 1545~1614)『日本諸島実記 Wahrhaftiger Bericht von den neuerfundenen japanischen Inseln und Königreichen』(フライブルグ刊)数種の宣教師書翰集などを参照してまとめた地誌的性格を具えた我が国の紹介書(折り込み木版地図あり、最古の日本地図といわれる)</p> <p>*グワルチュェリ(Gvaltieri, Guido)『天正遣欧少年使節記 Relationi della venuta de gli ambasciatori giaponesi à Romasino alla partita di Lisbona』(ローマ刊)1582年の天正遣欧使節の報告</p>	
1587 1588 1589	<p style="text-align: center;"><b>仏、ブルボン王朝 1589~1830</b></p> <p>*マフィ(Maffei, Giovanni Pietro 1535~1603)『インド史 Historiarum Indicarum libri XVI』刊。日本史が含まれる</p>	<p>*秀吉、キリスト教宣教師を追放(伴天連追放令)</p> <p>*イギリス、スペイン無敵艦隊を撃破</p> <p>*天草学林創立</p>
1590	<p>*デ・サンデ(De Sande, Eduardo)『デ・サンデ天正遣欧使節記 De Missione legatorvm Iaponensivm ad Romanam curiam, rebusque in Europa, ac toto itinere animaduersis dialogus』(マカオ刊)1582年の天正遣欧使節の見聞対話録。ヴァリニャーノがスペイン語で編集し、中国伝道使デ・サンデがラテン語に訳したもの。使節と共に将来された洋字印刷機、活字を用いて出版</p>	<p>*ヴァリニャーノ、天正遣欧使節の帰国に伴い再度來日し、初めて西洋活字印刷を伝える。この印刷機によって約30種類のローマ字本、国字本の語学書、教義書が印刷された(キリシタン版)</p> <p>*朝鮮通信使復活(豊臣秀吉と会う)</p>
1591	<p>*島原半島の加津佐においてローマ字本『サントスの御作業の内抜書』印行(現存最古のキリシタン版)</p> <p>*国字本『どちりいな・きりしたん』(?刊)</p>	<p>*ヴァリニャーノ、秀吉に謁見</p>
1592	<p>*ローマ字本『ドチリナ・キリシタン』、『ヒデスの導師』(以上天草刊)</p> <p>*国字本『ばうちずもの授けやう』刊</p> <p>* (この頃) 侯継高(国?)撰(中国明朝)『日本風土記』(全5巻)。先行の『籌海図編』(1563)、『日本考略』(1523)から採録したものと、『字書』欄に平仮名の書き方と読み方、『歌謡』欄に和歌40首近く、『山歌』欄に小唄などが収められている。また『語音』欄に日本語の単語56類1186語集められ充実。地図付き。我が国中世の風俗、国語・国文学研究上貴重な資料</p> <p>(この頃) 李言恭・郝傑編撰『日本考』(5巻)出る。上記『日本風土記』の改名されたもの</p>	<p>*秀吉、朝鮮出兵(~93 文祿の役)。この時朝鮮本と活版印刷術がもたらされ、陶工たちも連れて來られた。また、日・明、日・朝鮮関係断絶(1607年回復)</p> <p>*秀吉、マニラ総督に日本入貢の威嚇的勅告状を送る。(~94 3回)。日本・フィリピン(スペイン)関係始まる</p> <p>* (この頃) 明の呉承恩『西遊記』刊</p>
1593	<p>*フロイス、『日本史 Historia do Japão』を書き始める</p> <p>*ローマ字本『伊曾保物語 Esopo no Fabulas』、我が国最初の西洋書の翻訳(不干斎ハビアン訳)、『平家物語』、『金句集』(以上天草刊)</p>	<p>*後陽成天皇による文祿勅版『古文孝経』刊(古活字版)。京畿における活字印刷の始め。まだ現物は発見されていない</p> <p>*キリスト教(フランシスコ派)布教開始</p> <p>*スペイン商人ヒロン(Girón, Avila)フィリピンの第3回使節に伴い平戸に上陸</p>
1594	<p>*アルバレス(Álvares, Emmanuelo 1526~1582)『拉丁文典 De institvtione grammatica』(天草刊)。日本人神学生、修練生たちの</p>	



年代	日本研究の歩み	関連事項
	ラテン語学習用に編まれた。一部に日本語動詞の活用注釈などを含む	*明、秀吉を日本国王に冊封すると決める
1595	*トルセリーニ(Torsellini, Oratio 1544~1599)『ザビエル伝 Horatii Tvrsellini e Societate lesv, de Vita Francisci Xaverii』(ローマ刊)最初に公刊されたザビエルの伝記書 *イエズス会編『羅(拉)葡日対訳辞書 Dictionarium Latino-Lusitanicum ac Iaponicum』(天草刊)。ラテン語、ポルトガル語、日本語の対訳辞典。宣教師の日本語学習と日本人信徒のラテン語、ポルトガル語の学習に利用された。外国人による最初の日本語辞書 *リンスホーテン(Linschoten, Jan Huygen van 1563頃~1611)『旅行記 Itinerario』(3部作 アムステルダム刊 ~96)。従来秘密とされていたポルトガルの東方航海、貿易に関する情報を初めて各国に広く紹介した書。一部日本の記述あり *ルイシュ・テセイラ(Teixeira, Luiz 1560~1604?)『Iaponiae Insvlae descriptio』(アントワープ刊)。日本を独立に現した最初のカラー地図	*オランダ人、ジャワに達す
1596	*ローマ字本『コンテムツス・ムンデ』(天草刊) *黄慎、文禄の役の和議通信正使として来日。後『日本往還日記(東槎録)』を著す。この和議の不成立が翌年の慶長の役へと発展する	*スペイン船サン・フェリペ号、土佐浦戸に漂着、秀吉積荷と乗組員の所持金を召し上げる。この結果下記の事件へと発展した
1597	*委沆(1567~1618)慶長の役のとき捕虜として日本に連行され、帰国(1600)後『看羊録』を著す。(1656年刊)。抑留中の見聞記、報告集。藤原惺窩と知り合い、交流を深め近世日本朱子学の形成に影響を与えた	*日本軍、朝鮮へ再出兵(~98 慶長の役) *秀吉、キリスト教徒26人を京都、大坂にて捕え長崎にて処刑(26聖人の殉教)
1598	* (この頃)ヒロン『日本王国記 Relación del Reino de Nippon a que llaman corruptamente Jappon』第1輯筆(第2輯 1615, 第3輯 1619)。1549年、三好長慶の京都占領から筆を起し、徳川家康の晩年1615年までを記す *イエズス会編『落葉集 RACVYOXV』(長崎刊)キリシタンの漢字学習用として編まれた(国字本) *『イエズス会の日本書翰集 Cartas que os Padres e Irmãos da Companhia de Iesus escreuerão dos...』(エボラ刊)。1549から1580年までの書翰。エボラの大主教テオトニオ・デ・ブラガンサが日本の遣欧使節を記念して出版したもの	*秀吉没(63歳) * (この頃)柳成竜(1592~1607)『懲愆録』執筆にかかる。1592年から1598年にわたる日本の朝鮮出兵のことを、中央政府の要職にあった著者がその職務と関連して体験した事実を記録したもの *リーフデ号、ロッテルダム出港
1599	*国字本『ぎや・ど・べかどる』(長崎刊) *国字本『きるばとる・むんち』(長崎刊)	
1600	江戸時代 1600~1867 *ローマ字本『ドチリナ・キリシタン』、国字本『どちりな・きりしたん』、『おらしよの翻訳』(以上長崎刊)	*アダムス(Adams, William 1564~1620)イギリス人来日(日本名:三浦按針)(オランダ東インド会社リーフデ号パイロット、外交)。日本に来航した最初の英国人 *ヤン・ヨーステン(Yan Joosten, van Loodenstijn ?~1623 オランダ人、同上船にて来日(貿易)) *関ヶ原の戦い *イギリス、東インド会社設立(~23) *教皇クレメンテ8世、イエズス会以外の会の日本布教を許可 *徳川家康、朱印船貿易を始める(1592~95に秀吉によって創設)
1601	*グスマン(Guzman, Luis de 1543~1605)『イエズス会の東方伝道史 Historia de las misiones que han hecho los religiosos de la Compañia de lesvs』(アルカラ刊)。イエズス会のフランシスコ・	

年代	日本研究の歩み	関連事項
1602	<p>ザビエルが会創設者イグナチウス・デ・ロヨラの命を受けて、1541年から1600年までの東方伝道を国別に年代を追って記録したスペイン語の本(日本を含む)</p> <p>*ノールト(Noort, Olivier van 1558or59~1627)『世界周遊記 Beschryvinghe vande Voyagie om den geheelen Werelt Cloot』(アムステルダム刊)。日本の船や日本人を描いた銅版画はヨーロッパにおける最古の部類に入るといわれる</p> <p>*ブラウ(Blaeu, Willem Janszoon 1571~1638)『地球儀 Terrestrial globe』(アムステルダム刊)。我が国が3大島として描かれている</p>	
1603	<p>*イエズス会編『日葡辞書 Vocabulario da Lingoa de Iapam』(本編)(長崎刊)約33,000語を収載した日本語とポルトガル語の対訳辞書。西洋人による我が国最初の本格的な辞書</p>	<p>*アンジェリス(Angelis, Jeronymo de 1568~1623)イタリア人来日(イエズス会宣教師)北海道に最初に渡ったヨーロッパ人(1618)</p> <p>*スペイン船エスピリト・サント号、土佐清水港に漂着、家康乗組員を釈放し、スペイン船の保護を約したルソン長官宛の国書を与え、マニラへ送還</p> <p>*オランダ、東インド会社設立(1799解散)</p> <p>*キリスト教(ドミニコ修道団、アウグスチノ会)布教開始</p> <p>*マテオ・リッチ『坤輿万国全図』(北京刊)</p> <p>*徳川家康、江戸幕府を開く(征夷大将軍となる~1867)</p> <p>*ヴァリニャーノ、離日</p> <p>*フランシスコ会宣教師ルイス・ソテロ、フィリピン諸島の新長官使節として高議の目的で渡来(1624年処刑される)</p>
1604	<p>*上記『日葡辞書』(補遺編)刊</p> <p>*アコスタ(Acosta, José de 1539~1600)『西インド博物民族志』に、日本人(Japanese)の最初の用例'Iaponois'が用いられている</p> <p>*ロドリゲス『日本大文典 Arte da Lingoa de Iapam』(長崎刊)キリシタンによる日本文法の集大成ともいべき文典(~08)</p>	<p>*フランス、東インド会社設立</p> <p>*幕府、朱印符の制度を創設(~1655)</p>
1605	<p>*ヘイ(Hay, John 1546~1607)『イエズス会士書翰集 De rebus Iaponicis, Indicis et Pervanis epistolae recentiores』(アントワープ刊)日本、インド、ペルーに関するイエズス会士の書簡や記録からなる膨大な資料集</p> <p>*国字本『妙貞問答』、『サカラメンタ提要』(以上長崎刊)。我が国最初の赤・黒2色刷版</p> <p>*李氏朝鮮『海行録』成立(~07)。対日関係踏録の一つ</p>	<p>*幕府、スペインとの通商を許可</p>
1606	<p>*メルカトール(Mercator, Gerhardus 1512~1594)、ホンディウス(Hondius, I.)『日本図 Iaponia』(アムステルダム刊)彩色</p>	
1607		<p>*江戸時代、朝鮮通信使の第一回目来日(~1811計12回)。徳川将軍の代替わりの祝賀使節として定例化された</p>
1609	<p>*ドン・ロドリゴ。“Relacion y noticias de el Reino del Japon” (The British Library)</p>	<p>*オランダ、平戸に商館を設置</p> <p>*フィリピン総督ドン・ロドリゴ(Don Rodorigo de Vivero y Velasco)の船上総沖で難破、江戸上陸。家康父子に謁見。京都、大阪を経て大分まで旅行。翌年、田中勝助ら22名とメキシコに帰る</p> <p>*琉球、薩摩(島津氏)の所領となる</p> <p>*ガリレオ、天体望遠鏡を発明</p>
1610	<p>*国字本『こんてむつすむん地』(京都刊)。日本におけるキリシタン版の最後</p>	<p>*フェレイラ(Ferreira, Christovao 1580~1650)ポルトガル人来日(日本名:沢野忠庵)(イエズス</p>

年代	日本研究の歩み	関連事項
1611	* 全国でキリシタンの総数が75万人に達するといわれる	会宣教師)大坂で捕えられ、長崎で拷問にあい(転宗 * 易林本小山版『節用集』刊 * 秀忠、新イスパニア(メキシコ)と通商を許可 * (この頃)山田長政(?~1630)、シヤムに渡航 * 家康、ポルトガル人の貿易を許可 * 『鉄定訳聖書』(ロンドン刊) * 明の商人に長崎貿易を許可
1612		* 家康、キリスト教禁教令を発布(最初)
1613	ロマノフ王朝 1613~1917 * デューレ(Duret, Claude)『世界言語志宝典 Trésor de l'histoire des langues de cest univers, contenant les origines, beautez, perfections, decadences, mutations, ... chinoise, iaponoise, iaiuienne, indienne occidentale』刊。「いろは」がみえる * Ricasoli, R.M. Pandolfo. "Accademia Giapponica. Prima parte. (Bologna 刊)	* コックス(Cocks, Richard 1566~1624)イギリス人来日(イギリス平戸商館長)。彼の『日誌 1615~1622』(1883)は商館の経営状態や日英交渉を知る貴重な資料である
		* セーリス(Saris, John 1579?~1643)イギリス人来日(イギリス東インド会社クローブ号船長)。彼の『航海記』は1900年に発行される。家康に謁見 * ロドリゲス、マカオへ移る * イギリス、平戸に商館を設置(1623年閉鎖) * 伊達政宗、ルイス・ソテロを案内に支倉常長ら一行をメキシコ経由でスペイン、およびローマに派遣(1620年帰国)慶長遣欧使節。翌14年、スペイン国王フェリペ3世、教皇パウル五世に謁見 * 家康、キリスト教禁教令を発布
1614	* ピント『冒険巡廻記 Peregrinaçam de Fernam Mendez Pinto』(リスボン刊)。内容が興味本位に走り、往々にして史実を曲げた箇所もあり信用しがたいとする説もあるが、初期ポルトガル人の東方植民史ならびに日葡交渉史の側面史としての意義あり。ヨーロッパの読書界に広く歓迎されたという。(仏訳1645、英訳1653、独訳1671)	* 高山右近、内藤如安らキリシタン148人をマニラ、マカオへ追放 * 大坂冬の陣
1615	* アマチ(Amati, Scipione)『伊達正宗遣欧使節記 Historia del Regno di Voxv del Giappone』(ローマ刊)。支倉常長一行に関する記録で、著者は通訳を勤めた	* 大坂夏の陣、大坂城落城 * 支倉常長、スペイン国王フェリペ3世、ローマにて教皇パウロ5世に謁見。また、スペインからイタリアに赴く途中、悪天候のためフランスのサントロベに寄港(日仏交流の始まり)
1616	清時代 1616~1912	* 徳川家康没(75歳) * 幕府、キリスト教を禁ずるとともに明の商船以外の外国船の来航地を長崎・平戸に限定
1618	三十年戦争 1618~1648 * ピネイロ(Piñeyro, Luis)『新日本史 La nouvelle histoire du Japon』(パリ刊)	* 釜山の倭館成る
1619		* カロン(Caron, François 1600~1673)オランダ人来日(オランダ平戸商館長 第8代) * コリヤード(Collado, Diego 1589?~1641)スペイン人来日(ドミニコ会宣教師) * オランダ、ジャワに総督を置き、パタヴィア市を建設
1620	* ロドリゲス『日本小文典 Arte breve da lingoa de Iapoa』(マカオ刊)入門者のために前著『日本大文典』(1604)を簡略にしたもの * ロドリゲス『日本教会史 Historia da Igreja do Japam』稿本完成(~22)	* メイフラワー号、アメリカへ渡る(清教徒の北米移住)

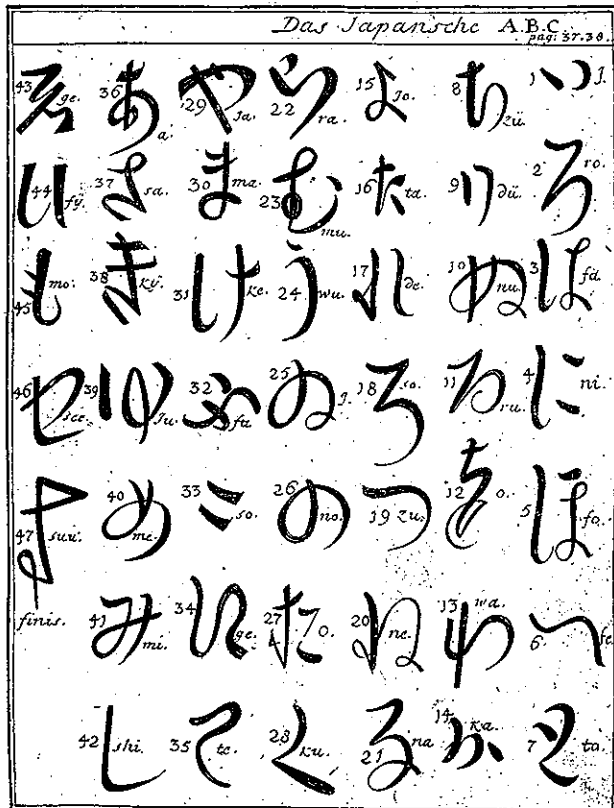
年代	日本研究の歩み	関連事項
1623 1624		*イギリス商館閉鎖 *日本・スペイン両国の通交貿易関係断絶 *オランダ、台湾占領(～61)
1625	*パーチャス(Purchas, Samuel 1575頃～1626)“Hakluytus posthumus”(全4巻)(ロンドン刊)	
1627	*ソリエ(Solier, François)「日本宗教史 Histoire ecclesiastique des isles et royavmes dv Iapon」(パリ刊)	*台湾長官スイツ(Nuijts, Pieter)日本船との貿易協定交渉のため来日(幕府、拒絶)
1630	*ドミニコ会編「日西辞書 Vocabulario de Iapón」(マニラ刊)。「日葡辞書(1603年)」のスペイン語訳版	*キリスト教関係書の輸入禁止
1632	*コリヤード「日本語文典 Ars grammaticae Japonicae linguae」(ローマ刊) *コリヤード「備梅録 Niffon no cotobani yô confesion」(ローマ刊)。「教義宣言の文」と「告解の文」との2部からなり、日本語をローマ字で左ページに置き、右のページにイタリックで印刷されたそのラテン語訳を置いて、左右対照させたもの。当時の日常語を伝える資料として、また信徒の生活や風俗習慣を知る上でも貴重な文献 *ドミニコ会編「羅西日対訳辞書」(ローマ刊)	
1633	*オランダ商館長一行による江戸参府始まる(～1850 166回) *クーケバックル(Couckebacker 又は Koeckebacker, Nicolas)オランダ平戸商館長来日。彼の島原の乱参戦日記の描写は後吉雄如淵が「天馬異聞」として訳述刊行	*第一次鎖国令発布(奉書船以外の日本船の海外渡航、帰国禁止) *ガリレオ・ガリレイ、地動説をとるな宗教裁判にかけられる
1634		*ロドリゲス、マカオにて没(74歳)
1635		*貿易を長崎に限り、日本人の海外渡航と在外日本人の帰国禁止。朱印船貿易の終焉
1636	* (?) 洪舜明(朝鮮)「倭語類解」成立。約3400語の日本語を諺文(ハングル)対比で示す	*長崎・出島完成 *クルテ神父(Courtet, Guillaume 1590～1637)禁教下琉球に密航し、捕えられ、長崎で殉教(我が国に最初に来たフランス人) *第四次鎖国令発布
1637		*アメリカ、ハーバード大学創立 *島原、天草のキリシタン、圧政に対して蜂起(島原の乱)
1639		*第五次鎖国令発布。オランダ以外の西洋人の来日を全面禁止(鎖国の完成) *ロシア人、オホーツク沿岸に達する
1640		*ポルトガル、スペインより独立
1641	*オランダ商館から「阿蘭陀風説書」が幕府に提出され始める(～1859)。鎖国時代の幕府にとって貴重な海外情報源となる	*オランダ商館、平戸から長崎・出島に移転 *オランダ、ポルトガル領マラッカを占領
1642	清教徒革命 1642～1649	
1643		*フリース(Vries, Maarten Gerritsz ?～1647)北海道、千島列島探検→1853年も見よ
1644	明の滅亡。清、中国支配始まる	
1645	*カロン「日本大王国志 Beschrijvinghe Van het Machtigh Coninckrijcke Japan」(アムステルダム刊)。オランダ人が書いた最初の日本に関する書物。地球、歴史、宗教、政治等各方面にわたる。英、独、仏、伊、スウェーデン、ラテン語などに翻訳され、後年モンタヌスやケンペルの日本紹介書が出版されるまで日本を知るための唯一の手がかりとなった。(1648年に単行書となる)	*「万国総図」(長崎刊)。我が国で最初に刊行された西洋系世界地図
1646	*カルディン(Cardim, Antonio Fransisco 1596～1659)“Fas-	*江戸にキリシタン屋敷(牢獄)できる

年代	日本研究の歩み	関連事項
1647	<p>ciculus e Japonicis Floribus, suo adhuc madentibus sanguine] (ローマ刊) イエズス会士および日本の信者たちの殉教を述べ、鎖国前後の日葡関係も知ることができる</p> <p>* (この頃) ヤンソン (Jansson, J.) 『日本図 Iaponiae Nova Descriptio』 (アムステルダム刊) 彩色</p>	<p>* ポルトガル船、長崎に來航し、貿易再開を求める (幕府、拒絶)</p>
1649	<p>* バアレニウス (Varenius, Bernhardus 1622~1651頃) 『日本王国誌 Descriptio Regni Japoniae』 (アムステルダム刊)。ドイツにおける日本研究の先駆的業績。(トルセリーニの『ザビエル伝』、マルコ・ポーロの『東方見聞録』、カロンの『日本大王国志』などを参考にして書いた日本の歴史、地理、ラテン語。小型本 (12cm))</p>	
1650	<p>* ブリエ (Briet, Philippe 1601~1668) 『日本王国図 Royaume du Japon』 (パリ刊)</p>	<p>* (この頃) オランダ東インド会社による日本磁器輸入始まる</p>
1651		<p>* ヴイルマン (Willman, Olof Eriksson 1623? ~1673) スウェーデン人來日 (オランダ東インド会社商館長アドリヤーン・ファン・デン・ブルフの随員)</p>
1652		<p>* トマス・ホップズ『リヴァリアサン』刊</p>
1653?	<p>* バルトーリ (Bartoli, P. Daniello 1608~1685) 『日本耶穌会史 Dell'istoria della Compagnia di Gesv. II : Giappone』 (ローマ刊)</p> <p>* ピント、ジェント (Gent, H.C.) 訳 "The voyages and adventures of Fernand Mendez Pinto." (ロンドン刊)</p>	<p>* 林鸞峰『日本王代一覽』 (7巻7冊) 成る</p>
1655	<p>* マルティニ (Martini, Martino 1614~1661) 『日本王国図 Iaponia Regnum』 (アムステルダム刊)</p> <p>* 南龍翼 (1628~1692) 『扶桑録』 (李朝時代刊)。朝鮮通信使の従事官として來日。本書のうち、『聞見別録』が日本観察の部分</p> <p>* 『日本紀行』 (写本)。家綱の四代將軍襲職祝賀に來日した通信使の日々記。著者不明</p>	<p>* 糸割符制を廃し、自由貿易とする</p>
1656		<p>* 日本の陶磁器の輸出始まる</p>
1657		<p>* 徳川光圀『大日本史』編集に着手 (~1906)</p>
1659	<p>* ヤンソン (Jansson, Jan 1596~1664) 『日本およびエゾ地図 Nova et accurata Iaponiae, terrae Esonis』 (アムステルダム刊)。日本の東北辺を探検したフリースが編集した海図を参考に作図。エゾが実存的になった</p>	
1660	<p>英、王政復古</p>	<p>* ロンドン王立協会設立</p>
1661	<p>ルイ14世親政 (1661~1715)</p>	<p>* ベルサイユ宮殿建設開始</p> <p>* 聖祖康熙帝即位 (~1722)</p>
1663	<p>* カロン、ショルテン (Shorten, Joost)、マンレイ (Manley, Roger) 英訳『日本大王国志 A true description of the Mighty Kingdoms of Japan and Siam』 (ロンドン刊)</p>	<p>* オランダ商館長、江戸参府の祈り、將軍家綱にヨントン「動物図説」を献上</p>
1664		<p>* フランス、東インド会社再興</p>
1666		<p>* 中村惕斎『訓蒙図彙』刊。我が国最初の絵入り百科事典</p> <p>* オランダ人ハメル (Hamel, Hendrik) 朝鮮から脱出し、五島に着く。後『朝鮮幽囚記』を著す (1668年刊) 西洋人による初めての朝鮮紹介書</p>

年代	日本研究の歩み	関連事項
1667	* ヴィルマン『日本旅行記 Beskrifwes een Reesa till OstIndien, China och Japan...』(Wisingsborgh 刊) * ヴィルマン『日本王国略記 Een kort beskrifning...sampt Konungari jket Japan』(Wisingsborgh 刊)	* ミルトン『失楽園』刊
1668		* 貿易の支払いを銀から金に改める
1669	* モンタヌス(Montanus, Arnoldus 1625頃~1683)『東インド会社遣日使節紀行 Gedenkwaardige Gesantschappen der Oost-Indische Maetschappy aen de Kaisaren van Japan』(アムステルダム刊) 自己の見聞によってではなく、耶蘇会士の書翰ならびに商館員らの報告によりまとめた初期日本紹介書。英(1670)、独、仏(1680)語に訳され広く読まれた。地図3枚付き	* パスカール『パンセ』刊
1670	* 『コスモグラフィー(宇宙誌)』。ロシア最初の日本の自然、地理、民族、政治、社会、歴史などを述べた本	* 林春斎『本朝通鑑』完成 * イギリス、アモイに商館を設置 * ハドソン湾会社設立
1672	* アーノルド(Arnold, Christoph)『日本・シヤム・朝鮮三国誌 Wahrhaftige Beschreibungen dreyer mächtigen Königreiche Japan, Siam und Corea』(ニュールンベルグ刊)	* 日本、倭館を釜山から草梁に移す
1673		* イギリス商船リターン号長崎に入港(幕府、日英通商関係の復活を拒否)
1675		* 幕府、小笠原諸島巡見
1676	* ストライス(Struijs, Jan Janszoon ?~1694)“Drie aanmerkelijke Reizen door Italiën, Griekenlandt, Lijflandt, Moscovien, Tartarijen, Meden, Persien, Oost-Indien, Japan, etc.” (アムステルダム刊) オランダ人旅行家による紀行文(日本含む) * 康遇聖(朝鮮)『捷解新語』刊。文禄の役で捕らえられ滞日10年、帰国後李朝の通訳官として日本語一語文対訳の日本語学習用教科書を編集	* グリニッチ天文台設立
1680	* タベルニエ(Tavernier, John Baptista)『異聞集 A collection of several relations & treatises singular and curious』(ロンドン刊) 日本の項あり	* コメディ・フランセーズ劇場創立
1682		* ロシア、ピョートル1世(大帝)即位(~1725)
1683	* 汪楫、尚貞の冊封正使として来琉。後『使琉球雜録』を著す(全5巻)	
1687		* ニュートン、万有引力の法則を説く
1688	<b>英、名譽革命</b>	
1689	* クラセ(Crasset, Jean 1618~1692)『日本西教史 Histoire de l'eglise du Japon, 2vols』(パリ刊)。イエズス会の日本伝道史。ソリエ(1627)の著書に依存するところ多し。英訳(1705~1707)、伊訳(1737)、ポルトガル訳(1749~1755)がある	* 雨森芳洲(1668~1755)、対馬藩に仕え朝鮮との交流に尽くす * 長崎に唐人屋敷(唐館)が完成。中国人をここに收容
1690		* ケンペル(Kämpfer, Engelbert 1651~1716) ドイツ人、オランダ東インド会社商館医官として来日。滞日中、商館長に従って江戸に参府。5代将軍綱吉にも謁見。帰国後滞日経験をもとにして、日本の社会、宗教、動植物および江戸参府紀行などを内容とする『日本誌』(1727年)を著す。ヨーロッパの日本観、日本研究に大きな影響を与えた。1723、25年、彼の遺稿はイギリスの自然科学者で富豪であったスローン卿の手に帰し、後、大英博物館に収蔵された * 湯島孔子廟完成(後の昌平坂学問所)

年代	日本研究の歩み	関連事項
1691		* ロック[人間悟性論]刊
1692	* マイスター(Meister, George)[東インドの庭園技師 Der Orientalisch-Indianische Kunst-und Lust-Gärtner](ドレスデン刊)。日本の記述あり。(1682、85年に出島に来航したことあり)	* ケンペル、商館長に從い江戸参府(92年にも) * ケンペル、帰国する
1693		* 松下秀明(見林)[異称日本伝](3巻15冊)刊
1694		* チベット、ポタラ宮殿完成 * イングランド銀行設立
1695		* 西川如見[華夷通商考](京都刊)
1696	* ベイル(Bayle, Pierre 1647~1706)[歴史的批評的辞典 Dictionaire historique et critique]刊。日本宗教観の項あり	* (この頃)大坂の商人伝兵衛、カムチャツカに漂着。後、モスクワに送られピョートル大帝に拝謁
1697	* 日露両国人の最初の出会い(ウラジミル・アトラソフが千島列島を望見した年とも)	
1699	* レメゾフ(S.U.)の[全シベリア都市、河川、土地図]に「日本島」が記載される。ロシアにおける日本地図の最初	* 清、イギリスに広東貿易を許す
1701		* プロイセン王国成立 * スペイン継承戦争(~14)
1702		* 赤穂浪士の仇討
1703		* ピョートル大帝、ペテルブルグ市を建設

五十音図



マイスター「東インドの庭園技師」(1692)より

年代	日本研究の歩み	関連事項
1704	*サルマナザール(Psalmanazar, Georges 1679~1763)『台湾誌 An historical and geographical description of Formosa』(ロンドン刊)空想で捏造した書。この中に、'Japanese', 'Japanese', 'Japanner', 'Japanois', 'Japan'の用例がある	*伊藤東涯『三韓紀略』(写本 ~1711)。簡明な朝鮮の地誌
1705	*ロシア、ペテルブルグに日本語学校創設。伝兵衛、最初の日本語教師となる(世界最初の日本語学校)	
1708		*イエズス会イタリア人宣教師シドッチ(Sidotti, Giovanni Battista 1668~1715)禁教下屋久島に潜入し、捕らえられ長崎から江戸に護送され入牢。新井白石によって取り調べを受ける(1709)。白石、後『采覧異言』、『西洋紀聞』を著す
1710		*陳倫炯、米日。後『海國聞見録』を執筆
1711	*カムチャツカに漂着した漁民サニマ、ペテルブルグに送られ、伝兵衛の助手として日本語を教えるという *任守幹『東槎日記』(李朝時代写本)。家宣の六代將軍襲職祝賀に来日した時の日記	*新井白石、朝鮮通信使接待法を改む
1712	*ケンペル『廻国奇観 Amoenitatum Exoticarum Politico-Physico-Medicarum Fasciculi V. J』(レムゴー刊)。日本に関するものが5章あり(針術、灸点、茶、紙、鎖国論)。生存中に出版された唯一の単行本。ラテン文	*ピョートル大帝、首都をモスクワよりペテルブルグへ移す
1713		*新井白石『采覧異言』成る
1715	*シャルルボア(Charlevoix, Pierre 1682~1761)『日本切支丹史 Histoire de l'établissement, des progrès et de la décadence du Christianisme dans l'empire du Japon』(全3巻)(Imprimeur-Libraire, rue des Jésuites, près le Collège 刊)	*新井白石『西洋紀聞』(初稿)成る *正徳新例発布。貿易制度を改める(長崎新例)
1716	享保の改革 1716~1745	
1717		*ケンペル没 *『康熙字典』成る *徐葆光、冊封副使として琉球に着く *マリン(Marin, Pieter)『蘭仏辞書』刊 *ラッフルズ(Raffles, Sir T.S.)『ジャワ誌』刊 *横島昭武『和漢音訳書言字考節用集』刊 *『皇輿全覽図』完成。ヨーロッパ式測量法による中国全図
1719	*申維翰(1681~?)朝鮮通信使の製述官として来日。後『海游録』を著す。日記体の本文と日本見聞録よりなる	*デフォー『ロビンソン・クルーソー』成立。 'Japanese'と'Japanners'の用例あり
1720	*徐葆光『中山伝信録』(全6巻)刊。琉球の歴史、地理、風俗、往復の航海などについて記述。多数の図あり	*キリスト教以外の洋書の輸入解禁(洋学起こる)
1723		*スローン卿(Sloane, Sir Hans)ケンペルの草稿・収集品を入手
1724	*ファレンダイン(Valentyn, François 1666~1727)『東印度古今記 Oud en Nieuw Oost-Indiën』(アムステルダム刊 ~26)。第5部が日本で、日蘭貿易史をはじめ、地誌、將軍表などを記す	
1725		*ロシアの探検家ベーリングの北方探検(~30)。28年、ベーリング海峡発見 *ロシア帝国に科学アカデミー創立
1726	*スイフト(Swift, Jonathan 1667~1745)『ガリバー旅行記 Gulliver's travels』(ロンドン刊)。日本に関する記述あり(Nippon, エド、ナガサキ)。ケンペルの『日本誌』も引用	*大坂に徳徳堂を設置
1727	*ケンペル著、シヨイヒツァー(Scheuchzer, J.C.)英訳『日本誌』	*ロシアと清の境界を定む(キヤフタ条約)



年代	日本研究の歩み	関連事項
	The history of Japan(全2巻)(ロンドン刊 ~28)。従来の想像による日本像をくつがえし、2年余の滞日中に見聞収集せる資料を元に地理、動植物から民族学、歴史、政治、宗教、対外貿易までを扱った本格的、体系的な日本研究書を著し、日本研究上に新紀元を画した。およそ一世紀後にシーボルトの「日本」が出るまで、本書は日本に関する最も詳細で内容の充実した記述として、欧米の識者の中で広く参考された。シーボルト自身長崎へ持参しているし、黒船のペリー提督も船上でいつも手元においてひもといていたといわれる。また、江戸時代の我が国の知識人や政治家にも少なからぬ影響を与えた。彼の在世中には出版されず、まずこの英訳本が刊行された。蘭語、仏語に訳され版を重ねた。独語原文は1777~79に出版。銅版挿絵45枚挿入	*小笠原諸島が左記ケンベルの「日本誌」に刊本として初めて記述される
1728		*チェンバース「万有技芸科学事典」刊
1729	* Deel I, Isaak Tirion. "Hedendaagsche Historie of Tegenwoorde Staet van alle volkeren"(Amsterdam) *ケンベル「日本誌 De beschrijving van Japan」(ハーグ刊)。蘭訳版(英訳本から)	
1730	*ケンベル「日本誌 Histoire naturelle, civile, et ecclésiastique de L'Empire du Japon」(ハーグ刊)仏訳版(英訳本から)	
1730	*帝政ロシア最初の日本関係単行本、「日本誌」刊。フランスの旅行家ジャン・タヴェルニエの「航海誌」とカロン「日本大王国志」にもとづいて編訳された。(1734年とも)	
1734		*「ターヘル・アナトミア」(「解体新書」原本、阿姆斯特ダム刊)
1735		*清の乾隆帝(高宗)即位(~1796)
1736	*シャルルボア「総説日本史 Histoire et description générale du Japon」(2巻または9巻 パリ刊) * Salmon, Thomas "Tegenwoordige staet van't keizerryk China en Japan"(Amsterdam)。世界史の第一巻目。日本図あり *カムチャツカに漂着した(1729年か)権佐と宗佐、ペテルブルグに送られ科学アカデミーの日本語教師となる。ペテルブルグ日本語学校の監督官アンドレイ・ボグダーノフ(Andrey Bogdanov 1692~1766)は漂流民の日本人教師の協力で「日本語会話入門」、「簡略日本文法」、「新スラブ日本語辞典」などを作成	
1737	* Hamilton, Alexander(d. 1732) "A new account of the East Indies."(エディンバラ刊)	
1738	*オヤングレン(Oyanguren, Melchor)「日本語文典 Arte de la lengua Japona」(メキシコ刊)。バスク系のスペイン人であり、フランシスコ派に属した学僧で日本に来たことはない。先人の文法書とフィリピンにいた日本人との交渉によって編述	*シュパンベルク(デンマーク人、ペーリング探検隊員)、千島・日本近海に來航。日本人と接触
1739	*シュパンベルク, M.R.らのロシア探検隊陸前、仙台、蝦夷を訪問	*ムガル帝国没落す
1740		*スウェーデン王立科学アカデミー創立 *八代將軍徳川吉宗、青木昆陽、野呂元丈にオランダ語を学ばせる(蘭学奨励) *プロイセン王フリードリヒ大王即位(~86)
1743		*オーストリア継承戦争(~48) *ショメール(Chomel, Noel)「家庭百科辞典」刊。宇田川玄真他訳「厚生新編」(1811年の本版)
1744		*青木昆陽「和蘭文字略考」成る(初歩的なオランダ)

年代	日本研究の歩み	関連事項
1748 1751		<p>ダ語学習書) *モンテスキュー「法の精神」刊 *ダランベール、ディドロらフランスで百科全書「L'Encyclopédie」の編さん(～75)「日本人の哲学」の項目あり</p>
1754	*シャルルボア【総説日本史 Histoire du Japon】(新版 全6巻パリ刊)	*コロンビア大学(北米)創立
1756		*英仏植民地の七年戦争(～63)
1759		*大英博物館創立(1753とも) *ヴォルテール【カンディード】刊
1762	露、エカテリーナ2世即位 1762～1796	*ルソー「民約論」、【エミール】刊
1763	*【朝鮮来聘宝暦物語】。宝暦14年の家治襲職を祝う11回日の朝鮮通信使一行に関する日本側の記録。殺人事件が起こり、当時の日本人に大きな関心を引き起こした	*平賀源内【物類品鑑】成る
1764	*ベラン(Belin, Jacques Nicolas 1703～1772)【日本帝国図 Carte de l'Empire du Japon】(パリ刊) * Krasheninnikov, Stepan Petrovich “The history of Kamtschatka and the Kurilski Islands”(Glocester 刊)	* 汪鳳、来日。後「袖海編」を執筆
1767 1768	ペテルブルグの日本語学校、イルクーツクに移転(1754とも)	
1770年代	英、産業革命	*クック、第一次南太平洋探検(～71) *【エンサイクロペディア・ブリタニカ】編集始まる(～71)
1771		*ベニョフスキー(Benyovsky, Moritz Aladar von 1746～1786)ハンガリー人、阿波、奄美大島に上陸。日本を初めて体験した東欧人(日本名：ハン・ベンゴロウ) *前野良沢【蘭訳笠】成る。のち補訂して【和蘭訳笠】(1785)という。日本人による外国語入門書として最初のもの
1773 1774		*ローマ教皇、イエズス会解散を命ずる *杉田玄白・前野良沢ら【解体新書】刊。(オランダ語からの翻訳)
1775	米、独立戦争と連合 1775～1789	*ツェンベリー(Thunberg, Carl Peter 1743～1828)スウェーデン人来日(植物学)(ツェンベルグとも)
1776	*ファン・ハーレン(Van Haren, Onno Zwierv 1713～1779)【日本論 Van Japan】(Zwoille 刊)。日本キリシタン研究書	*アメリカ13州、独立宣言発表 *ツェンベリー、江戸参府に随行 *アダム・スミス【国富論】刊
1777	*ケンペル著、ドーム(Dohm, Christian Wilhelm)編【日本誌 Geschichte und Beschreibung von Japan】(全2巻)(レムゴー刊、～79)。自筆原稿をもとに独語版刊行	*ギボン【ローマ帝国衰亡史】刊(～88) *谷川士清【和蘭菜】(一冊目刊行 ～1883年 93巻にて完了)
1778	*ケンペルの【日本誌】(蘭語版)我が国に初めて船載される(阿蘭陀通詞吉雄耕牛が所有)	ロシア船、蝦夷地(クナシリ島)に来て松前藩に通商を求める(翌年拒否)
1779		*ティツィング(Titsingh, Isaac 1744(-45)～1812)オランダ人来日(長崎・出島商館長) *塩保己一【群書類従】の編纂開始(～1819) *長久保赤水作【改正日本輿地路程全図】刊。緯線

年代	日本研究の歩み	関連事項
1780	*ツェンペリー「日本国民志(日本貨幣志)Verhandeling over de Japansche Natie...」(アムステルダム刊)。日本の風俗習慣および貨幣についての報告、論考	と方角線を引画した最初の日本地図
1781		*シュレホフ・ゴリコフ(露)会社設立(~1799)
1782	天明の大飢饉 1782~1787 *タターリノフ(Tatarinov, Andrey)「露日辞典」成立。ロシア語と日本語の対訳辞書。日本語をロシア文字と平仮名で示す。	*伊勢の大黒屋光太夫(1751~1828)の神昌丸漂流、翌年アリューシャン列島に漂着
1783		*工藤平助「赤蝦夷風説考」(上下2巻)刊
1784	*ツェンペリー「日本植物誌 Flora Japonica」(Lipsiae刊)。39図版付き	*幕府、第一回蝦夷地巡察 *“Asiatic Society of Bengal”設立 *イギリス、インドに監督局を設置 *博多湾志賀島で「倭奴国王印」の金印出土 *林子平「三國通覧図説」著す(翌年刊)
1785		*林子平「三國通覧図説」著す(翌年刊) *私のラ・ペルーズ、太平洋探検 *“The Times”(英)創刊
1786		*最上徳内、千島を探検しウルップ島に至る *林子平「海国兵談」(全16巻)成る(91年刊)
1787	寛政の改革 1787~1793	*森島中良「紅毛雑話」刊 *ラ・ペルーズ、ラペルーズ(宗谷)海峡発見 *ロシア・トルコ戦争(~1792)
1788	*ツェンペリー「ヨーロッパ、アフリカ、アジア紀行1770~1779 Resa uti Europa, Africa, Asia」(全4巻 ウブサラ刊 ~93)。日本への航海記を含み、第3巻(1791)の「日本語」の項にスウェーデン・日対訳ABC順による語彙集と文法観察を施す。上記「日本国民志」(1780)も収められている	*大槻玄沢「蘭学階梯」刊
1789	フランス革命 1789~1794	*ワシントン、アメリカ初代大統領となる(~97)
1790	*ベニョフスキー「ベニョフスキー航海記 The memoirs and travels of Mauritius Augustus, count de Benyowsky」(全2巻 ロンドン刊)原稿はフランス語で書かれたが、まずこの英訳が出版された。続いて仏原文(1790)、独訳(1790)、ポーランド訳(1894)、オランダ訳、スウェーデン訳、スロバキア訳、ハンガリー訳(1888~90)が出た。ヨーロッパの読書界にベニョフスキー・ブームを巻き起こしたが、内容は粉飾と誇張に満ちているといわれる *レセップス(Lesseppe, J. B. B.)“Journal historique du voyage de Mr. de Lesseppe, 2 vols”	*オランダ商館長一行による江戸参府を5年に一度とする *寛政異学の禁(聖堂において異学の講究を禁止)
1791	*漂流船神昌丸の水夫、新蔵と庄蔵ロシアに帰化してイルクーツクの日本語学校教師となる	*光太夫ら、エカテリーナ2世に謁見 *イギリス船、紀州大島に来航、通商を請うが許されず
1792	*ツェンペリー「日本語観察 Observaciones in linguam Japonicam」(ウブサラ大学紀要)をラテン語で発表	*ラクスマン(Laksman, Adam Kirilovich 1766~1803?)ロシア使節、漂流民大黒屋光太夫ら3名を伴い根室に来航し通商を求める(幕府は拒絶)(第1回派日使節)
1793		*司馬江漢「輿地全図」。わが国最初の銅版世界図 * (この頃)仙台の津太夫アリューシャン列島に漂着 *イギリス使節マカートニー卿、乾隆帝に謁見
1794	*ツェンペリー「日本植物図譜 Icones plantarum Japonicarum」(ウブサラ刊 ~1805)	*桂川甫周「北槎聞略」成る

年代	日本研究の歩み	関連事項
1795	*パリに東洋語学校創立 *ツェンペリー『紀行 Travels in Europe, Africa, and Asia, made between the years 1770 and 1779, 4vols』(ロンドン刊)英語版	*カント『永久の平和について』刊
1796	*稲村三伯ら『波留麻和解』完成(別名『江戸ハルマ』)。最初の蘭日辞典 *ラングレ(Langlès, L.)訳、ツェンペリー『紀行 Voyages de C.P. Thunberg, au Japon』仏訳版(全4巻)パリ刊。1788年の日本関係の部分訳	*ブロートン(Broughton, William Robert 1762~1821)イギリス人、蝦夷の内浦湾・絵鞆に入港(測量、プロビデンス号艦長) *清、アヘン輸入禁止
1797		*ラ・ペルーズ『世界周航記』刊
1798	*鄭希得(1573~?)『月峯海上録』。慶長の役(1597)で捕虜となり、阿波国徳島で抑留生活を送った時の日記	*ドゥッフ(Doeff, Hendrik 1777~1835)オランダ人來日(長崎・出島商館長) *近藤重藏、最上徳内らエトロフ島探検(「大日本忠登呂府」の標柱を建てて) *ナポレオン、エジプト遠征 *マルサス『人口論』刊 *本居宣長『古事記伝』成る(~1800)
1799		*間宮林蔵、初めて蝦夷地に渡る *幕府、松前藩の東蝦夷地を直轄とする *露米会社(露)設立(~1867) *オランダ東インド会社解散 *「ロゼッタ・ストーン」ナポレオンによるエジプト遠征軍の一士官によって発見 *伊能忠敬、蝦夷地を測量
1800	*李鼎元、冊封副使として来琉。後『使琉球記』を著す	
1801	*ケンペル『日本誌』の一部を志築忠雄が『鎖国論』としてオランダ語から訳す(刊行は『異人恐怖伝』で1850年)	
1802		*山村才助『訂正増訳采覧異言』成立。新井白石の『采覧異言』(1713)を訂正増補したもの。江戸時代における最も優れた世界地理書と言われる。未刊に終わる
1804	<b>第一帝政・ナポレオン 1804~1815</b> *ブロートン『北太平洋発見記 A voyage of discovery to the North Pacific Ocean』(ロンドン刊)。日本を含めた東洋近海の航海記で、日本、琉球の語彙が採録され、国語学史上貴重な資料といわれる。地図付 *幕府、朝鮮通信使の礼を対馬で受けることにする	*クルーゼンシュテルン(Kruzenshtern, Ivan Fyodorovich 1770~1846)ロシア人來日(海軍軍人、航海家)。 *レザノフ(Rezanov, Nikolai Petrovich 1764~1807)第二回ロシア遣日使節、仙台の漂民津太夫ら4人を伴ないナジェジダ号に乗って長崎に来航し通商を求める。(幕府は拒絶)
1805		*清、西洋人の書物輸入や布教を禁止 *ネルソンのイギリス艦隊、仏・西連合艦隊を破る(トラファルガル海戦)
1806		*露米会社付き海軍大尉フボストフ、樺太南部の日本人部落を荒らす
1807		*イギリス人宣教師モリソン(Morrison, Robert 1782~1834)広東着 *大槻玄沢編『環海異聞』(全15巻)完成
1808		*イギリス軍艦、フェートン号事件起こる(長崎入港)。英語学習の一契機となる *幕府、長崎通詞にフランス語の学習を命じる *イギリス、連合東インド会社設立

年代	日本研究の歩み	関連事項
1809	*クルーゼンシュテルン『世界旅行記』(ロシア語原本 ペテルブルグ刊 本文全3巻、図版全2巻 ~1813)。ナジェジダおよびネワ両艦による1803.4.5および1806年に渡るロシア人最初の世界航海記。第一巻に日本滞在記と長崎港の記述あり。また図版の部に当時の武士、町人、アイヌ人等の姿を精密美麗な色彩で描いている。英語(1813)、独語(1814)、スウェーデン語、仏語、伊語訳あり	*間宮林蔵、榎太を探検(離島であることを確認) *ブロムホフ(Blomhoff, Jan Cock 1779~1853) オランダ人來日(長崎・出島オランダ商館長) *間宮林蔵、間宮海峡を発見 *長崎通詞にロシア語と英語の兼修を命じる
1810		*藤林淳道(普山)『訳鍵』刊 *高橋景保ら『新訂万国輿地全図』刊 *奥平昌高、馬場佐十郎編『蘭語訳撰』刊 *アメリカ海外伝道団体 The American Board of Commissioners for Foreign Mission(美国公理会)設立 *ベルリン大学創立
1811	*レミューザ(Rémusat, Jean Pierre Abel 1788~1832)『シナ言語文学論 Essais sur la langue et la littérature chinoises』刊 *『諸厄利亜興学小筈(諸厄利亜国語和解)』(写本 10巻)刊。わが国最初の英学入門書	*ゴローヴニン(Golovnin, Vasilii Mikhailovich 1776~1831)ロシア海軍士官、ディアナ号艦長、国後島にて捕らえられ松前に護送され投獄される(1813年釈放) *リコルド(Rikord, Petr Ivanovich 1776~1855)ディアナ号副艦長、国後島に寄港 *朝鮮通信使を対馬にて接待(最後の通信使) *『厚生新編』の翻訳開始
1812	*ラングドルフ(Langsdorff, George Heinrich von 1773~1852)『世界巡航記 Bemerkungen auf einer Reise um die Welt in den Jahren 1803 bis 1807』(Frankfurt am Mayn. 2 vols. Atlas)。ナジェジダ号に便乗したドイツ人自然科学者の旅行記	*ロシア艦、高田屋嘉兵衛を国後海上で捕う *英米開戦(~14)
1813	*クルーゼンシュテルン著、ホップナー(Hoppner, Richard Belgrave)英訳『世界旅行記 Voyage round the world, in the years 1803, 1804, 1805, & 1806.』(全2巻)(ロンドン刊)	*馬場佐十郎(貞由)ら、ゴローヴニンよりロシア語を学習
1814	*本木正栄ら編『諸厄利亜語林大成』(全15巻)成る。我が国最初の英和辞典 *翁広平(1760~1843)『吾妻鏡補』別名『日本国志』(写本30巻本、28巻本の2種)。日本研究の埋もれた大作	*高田屋嘉兵衛の周旋によりゴローヴニン釈放 *伊能忠敬『沿海実測全図』成る *ウィーン列強会議 *ステイーヴンソン、蒸気機関車を製作
1815	*モリソン『華英辞典 A dictionary of the Chinese language, in three parts.』(全6巻)(マカオ刊 ~23)。英華部分もある	*杉田玄白『蘭学事始』成る(刊行は明治2年) *ウィーン会議
1816	*(この頃)ドーフ、日本人通詞と共にハルマの蘭仏辞典によって『道訳法児馬』の名で知られる蘭日辞典を編む(完成は1833年) *リコルド『日本沿岸航行記』(ペテルブルグ刊)。初期日露交渉史。露領に捕虜となった高田屋嘉兵衛の肖像あり。地図4葉付 *ゴローヴニン『日本幽囚記』ロシア語原本刊行。本書は独語(1817)、蘭語(1817~18)、仏語(1818)、英語(1818)などに訳され当時ヨーロッパでベストセラーになる	*ホール(Hall, J. Basil 1788~1844)イギリス人、米琉球(琉球研究)、中国へのアマースト使節団、ライラ号艦長(日本学者チェンパレンの外祖父)
1817	*ゴローヴニン著、シュルツ(Schultz, Carl Johann)訳『日本幽囚記 Begebenheiten des Capitains von der Russisch=Kaiserlichen Marine Golownin.』(全2巻)(ライプチヒ刊) *(この頃)イルクーツクの日本語学校、財政的困難から閉鎖	
1818	*ブルトン(Breton, M.)『日本の風俗・風習及び服飾 Le Japon』(全4巻)(パリ刊)。銅版画51葉挿入。小型本(13.5cm) *ゴローヴニン『日本幽囚記 Narrative of my captivity in』	*幕府、後約令を出す *イギリス人船、浦賀に來航し通商を求める(幕府は拒否)

年代	日本研究の歩み	関連事項
	<p>Japan, during the years 1811, 1812 &amp; 1813](全2巻)(英訳 ロンドン刊)</p> <p>*ゴローヴニン著、エイリエ(Eyriès, J.-B.-B.)訳『日本幽囚記 Voyage de M. Golovnin, capitaine de vaisseau de la Marine impériale de Russie.』(全2巻)(独訳から仏訳)(パリ刊)</p> <p>*ホール『朝鮮・琉球航海記 Account of a voyage of discovery to the West Coast of Corea and the Great Loo-Choo Island』(ロンドン刊)。住民との交流や風俗描写を中心。琉球をヨーロッパに紹介した最初の書物。H.J.クリフォードによる琉球語彙集あり。オランダ、仏、独、伊各語に訳された</p> <p>*マルコ・ポーロ、マースデン 訳・注(Marsden, William 1754~1836)『東方見聞録 The travels of Marco Polo』(ロンドン刊)</p>	<p>*モリソン、マラッカに英華学堂設立</p> <p>*フランクリン「自叙伝」刊</p> <p>*ボン大学創立</p>
1819	<p>*ティツィング『日本における結婚と葬儀の式典 Cérémonies usitées au Japon pour les Mariages et les Funérailles』(全2巻)(パリ刊)</p>	<p>*ゴローヴニン「ディアナ号航海記」刊</p> <p>*ラッフルズ、シンガポール占領</p> <p>*ペテルブルグ大学創立</p>
1820	<p>*ティツィング『歴代將軍譜 Mémoires et anecdotes sur la dynastie régnante des Djogouns, souverains du Japon』(パリ刊)將軍家の系図、5点の手彩色折込図版あり</p>	<p>*フィッセル(Fisscher, Johan Frederik van Overmeer 1799~?)オランダ人来日(長崎・出島商館員)</p>
1821		<p>*伊能忠敬「大日本沿海輿地全図」完成</p>
1822	<p>*ティツィング、ショバール(Shoberl, Frederic)訳『日本風俗図誌 Illustrations of Japan』上記2種類の仏語版から英語に訳される(ロンドン刊)。美しい挿絵あり</p> <p>*レミュザ、クラブロート(Klaproth, Heinrich Julius 1783~1835)らにより「アジア協会」(Société Asiatique)をパリに設立。機関誌“Journal Asiatique”を発刊</p> <p>*ツェンベリー「日本動物誌 Fauna Japonica」(ウブサラ刊)</p>	<p>*ギリシア独立宣言</p>
1823	<p>*クラブロート「アジア言語誌 Asia polyglotta」(パリ刊)。日本語系統についての記述あり</p>	<p>*シーボルト(Siebold, Philipp Franz von 1796~1866)オランダ商館医官として来日。日本研究を行うとともに長崎鳴滝の塾において西洋医学および一般科学を日本人に教授。高野長英、伊藤玄朴ら多数の優秀な弟子を育てる</p>
1824	<p>*ティツィング『日本の特色 Bijzonderheden over Japan, 2vols』('s=Gravenhage)刊。折り込み彩色図2枚挿入</p> <p>* (この頃)ショバール『日本 Japan』(ロンドン刊)。幅広い日本の紹介書。手彩色銅版画20葉挿入(The world in miniature シリーズ)</p>	<p>*シーボルト、長崎・鳴滝に塾を開く</p> <p>*足立左内、露和辞典『露西亜学塾』編さん</p> <p>*イギリス、ビルマと開戦(~26)</p> <p>*イギリス、マラッカを獲得し、シンガポールを植民地とする</p>
1825	<p>異国船打ち払い令 1825~1842 露、ニコライ1世即位 ~1855</p> <p>*ランドレス(Landresse, M.C.)、レミュザ訳『日本文典 Elémens de la grammaire japonaise』(パリ刊)。マカオ刊行ロドリゲス『日本小文典』(1620年)の仏訳版</p>	<p>*馬場佐十郎ゴローヴニンの「遭厄日本紀事」訳刊</p>
1826	<p>*シーボルト『日本語要略 Epitome Linguae Japonicae』(「パタビア学芸協会紀要、V. B. G. DI. XI. p63~136)発表。ラテン語で書いた簡単な日本文典</p>	<p>*シーボルト、商館長に従い江戸に参府する</p> <p>*クラブロート、林子平の『三国通覧図説』中の「無人島」(小笠原島)の記事をパリの『アジア関係論叢』に紹介する</p>
1827		<p>*ロンドン大学創立</p> <p>*メイラン(Meijlan, Germain Felix 1785~1831)オランダ人来日(長崎・出島商館長)</p> <p>*ギュツラフ「新約聖書」の日本語訳刊行</p>

年代	日本研究の歩み	関連事項
1828		<ul style="list-style-type: none"> <li>* イギリスの海洋探検家ビーチ(Beachey, F.W.)小笠原島発見(英領宣言)</li> <li>* シーボルト事件発生(高橋景保ら日本地図など国禁のものを与えたとして捕らえられる)</li> </ul>
1829		<ul style="list-style-type: none"> <li>* 『ウェブスター-英語辞典』刊</li> </ul>
1830	<ul style="list-style-type: none"> <li>* メドハースト(Medhurst, Walter Henry 1796~1857)『英和和英語彙集 An English and Japanese, and Japanese and English vocabulary』(パタビア刊)。イギリス人の宣教師による最初の英和和英対訳辞書。和英の部にイロハ順で7,000語余を収録</li> <li>* メイラン『日本風俗事情 Japan: voorgesteld in Schetzen over de zeden en gebruiken van dat rijk...』(アムステルダム刊)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* パリ、七月革命</li> <li>* ベルギー、オランダからの独立宣言</li> <li>* アメリカ人ら、小笠原島に移住</li> </ul>
1831		<ul style="list-style-type: none"> <li>* ダーウィンのビーグル号世界周航に出発(~36)</li> <li>* 朝鮮、イギリス船の通商を断る</li> </ul>
1832	<ul style="list-style-type: none"> <li>* シーボルト『日本 Nippon: Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzländern Yezo...』(ライデン刊 ~51)。シーボルトの日本研究の集大成。江戸時代の西欧人による日本研究書として、先のケンペルの『日本誌』(1727年)と共に双璧をなす。毎年1冊ずつ20冊予約出版されたが、彼の生存中には完成しなかった。(第2版: 全2冊 1897年、第3版: 本文2冊 図版2冊 索引1冊 1982年)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* クラブロート訳『三國通覧図説』(パリ刊)</li> <li>* “The Chinese Repository”(『支那叢報』)Cantonにて創刊(1851年廃刊)。中国で刊行された最初の欧文定期刊行物(日刊)</li> <li>* 尾張の音吉ら漂流。後アメリカに漂着</li> <li>* タトル商会(Charles E. Tuttle Company, Inc.)創立</li> <li>* イギリス商社ジャーディン・マセソン商会(Jardine, Matheson &amp; Co.)設立</li> </ul>

年代	日本研究の歩み	関連事項
1833	<p><b>天保の飢饉 1833～1836</b></p> <p>*ドゥッフ[ドゥッフ日本回想録 Herinneringen uit Japan](ハーレム刊)。ドゥッフ来朝前後頃のヨーロッパ情勢、日本をめぐる列強の動き、蘭日貿易の実態などを伝える</p> <p>*フィッセル[日本風俗備考 Bijdrage tot de kennis van het Japansche Rijk](アムステルダム刊)。彩色挿絵15点付き</p> <p>*メイラン[日本におけるヨーロッパ人の貿易の歴史的概観 Geschiedkundig Overzicht van den Handel der Europeezen op Japan](マタビア刊)</p> <p>*シーボルト、ホフマン(Hoffmann, Johann Joseph 1805～1878)『日本双書 Bibliotheca Japonica』(全6巻)(『マタビア学報 Lugduni Batavorum, folio, 1833～41』)。日本の言語、歴史、地理などに関する調査報告</p> <p>*シーボルト『日本動物誌 Fauna Japonica』(全5巻)(ライデン刊～51)</p> <p>*Thompson, Edward Maunde. “Diary of Richard Cocks, Capemerchant in the English factory in Japan. 1615～22”(2巻)(ロンドン刊)</p>	<p>*[ドゥッフ・ハルマ]([長崎ハルマ]成る)</p> <p>*全国各地に米騒動、うちこわし起こる</p> <p>*ステイヴンソン[宝島]</p>
1834	*ティツィング訳『日本王代一覧 Nippon O Dai Itsi ran』(パリ刊)	
1835	*シーボルト『日本植物誌 Flora Japonica』(全2巻)(ライデン刊～70)	*シュミット[蒙古語・ドイツ語・ロシア語辞書]刊
1837	<p><b>ヴィクトリア女王 1837～1901</b></p> <p>* (この頃)ギュツラフ訳『約翰福音之伝(ヨハネ福音書)』(シンガポール刊)。最初の邦訳聖書。日本漂流民の助けをえて訳した</p>	<p>*福沢諭吉生まれる(～1901)</p> <p>*トクヴィル[アメリカにおける民主主義]刊</p> <p>*ギュツラフ(Gützlaff, Karl Friedrich August 1803～1851)ドイツ人(オランダ伝道協会宣教師、聖書翻訳、通訳)。禁教下の江戸時代末期、日本との通商、宣教の門戸を開こうとし、漂流民送還に困み、モリソン号で日本に来たが、砲撃され空しくマカオへ引き帰した</p> <p>*アメリカ船モリソン号音吉ら7漂流を伴って浦賀・鹿児島に入港し、砲撃される(モリソン号事件)</p> <p>*大塩平八郎の乱</p> <p>*モールス、電信機を發明</p> <p>*ビング(Bing, Samuel)フランス人画商生まれる(～1905)</p>
1838		*緒方洪庵、大阪に蘭学塾「適々斎塾」を開く
1839		*レッグ(Legg, James 1815～1897)マラッカの[英華学堂(Anglo-Chinese College)]の校長となる
1840	<p><b>アヘン戦争 1840～1842</b></p> <p>* (この頃)シーボルト『日本辺界略図』作図。西洋人の手になる世界地図と関連した日本地図の完成(『日本』所載)</p>	*松浦允任撰『朝鮮通交大紀』成る
1841	<p><b>天保の改革 1841～43</b></p>	*土佐の中浜万次郎(1827～1898)ら遭難、米捕鯨船に救われアメリカに至る
		*ジュリアン(Julien, Stanislas 1799～1873)、『コレージュ・ド・フランス』の総長となる

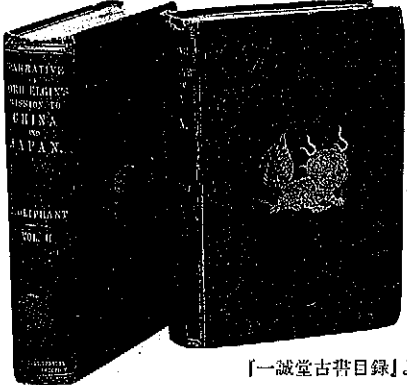


年代	日本研究の歩み	関連事項
1842	異国船打ち払い令緩和	<ul style="list-style-type: none"> <li>*メドハースト『華英辞典』(全2巻 上海刊~43)</li> <li>*世界最初の週刊絵入り新聞『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』創刊</li> <li>*清が上海他5港を開き、香港をイギリスに割譲(南京条約)</li> </ul>
1843		<ul style="list-style-type: none"> <li>*"The Economist"(英)創刊</li> </ul>
1844		<ul style="list-style-type: none"> <li>*オランダ特派使節、オランダ国王からの開国勸告書を提出(翌年、拒否)</li> <li>*フランス船、初めて那覇港に来航</li> <li>*清、アメリカと望廈条約、フランスと黄埔条約を結び開港</li> <li>*YMCA、ロンドンに設置</li> </ul>
1845	*ホフマン解説『日本図書文献目録 Catalogus librorum et manuscriptorum japonicorum』(ライデン刊)。フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト蒐集並びにヘーグ王立素物博物館所蔵(ブルムホフ、フィッセル収集書籍)日本書籍及び手稿目録。125部印刷	<ul style="list-style-type: none"> <li>*イギリス軍艦「サマラング号」長崎に来航し、退去を命ぜられる</li> <li>*箕作省吾『坤輿図説』(世界地理書)</li> <li>*松浦武四郎、初めて蝦夷地を探検</li> </ul>
1846		<ul style="list-style-type: none"> <li>*ベッテルハイム(Bettelheim, Bernard Jean 1811~1870)イギリス人、那覇に上陸(英国海軍琉球伝道協会宣教師、琉球語研究)。後琉球語訳の『聖書』作る</li> <li>*アメリカ・メキシコ戦争始まる(~48)</li> <li>*デンマークの軍艦ガラテア号、浦賀に来航(デンマーク人の初来日)</li> <li>*この頃アメリカの捕鯨業最盛期</li> <li>*フランス艦、長崎に来航(最初)し、退去を命ぜられる</li> <li>*スミソニアン・インスティテュション設立</li> </ul>
1847	*フィッツマイアー(Pfizmaier, August 1808~1887)柳亭種彦の『浮世形六枚屏風』をドイツ語に訳す(オーストリアの首都ウィーン刊)。日本文学作品の最初の欧訳 *ラウツ(Lautz, G.)『日本—その政治構造と市民組織 Japan in zijne staat skundige en burgerlijke Inrigtingen』(アムステルダム刊)	<ul style="list-style-type: none"> <li>*森有礼生まれる(~1889)</li> <li>*メドハースト『英華辞典』(全2巻)(上海刊~48)</li> <li>*香港で"The China Branch of the Royal Asiatic Society"設立</li> </ul>
1848	*ダニエル・デフォアの『ロビンソン・クルーソー漂流記』(1719)を黒田勉蔵がオランダ語から『漂流紀事』と題して翻訳。日本語に翻訳された最初の小説 *本木昌造ら、オランダから鉛活字印刷機を購入	<ul style="list-style-type: none"> <li>*マクドナルド(MacDonald, Ranald 1824~1894)アメリカ人、焼尻島に上陸(長崎英語教師)</li> <li>*商館医モーニッケ(Mohnike, Otto Gottlieb Johann 1814~1887)日本人に種痘を試み成功</li> <li>*マルクス、エンゲルス『共産党宣言』(ロンドン刊)</li> <li>*ウィリアムズ(Williams, Samuel Wells 1812~1884)『中国総論 The middle Kingdom』(ニューヨーク&amp;ロンドン刊)。英語で書かれた中国に関する権威書</li> <li>*カリフォルニアのゴールド・ラッシュ</li> </ul>
1849	*フィッツマイアー「万葉集についての考察 Beitrag zur Kenntniss der ältesten japanischen Poesie」を『ウィーン学士院紀事』に発表。欧州における万葉集研究の最古の部類にはいる	
1850	太平天国 1850~1864	*ゴージェ(Gautier, Judith G.)フランス人作

年代	日本研究の歩み	関連事項
1851	<p>* ランドール編・注(Rundall, Thomas 1801~1900)“Memorials of the Empire of Japan in the XVI and XVII centuries”(ロンドン刊)</p> <p>* de Jancigny, A. Dubois. “Japon, Indo-Chine/Empire Birman(ou Ava), Siam, Annam(ou Cochinchine),...”(パリ刊)</p> <p>* ドイツの言語学者ホフマン、オランダのライデン大学最初の日本語教師となる。1830年オランダでシーボルトに会い、その助手となり日本語、日本学を研究する。ヨーロッパの日本学の基礎を築くのに貢献した。日本滞在の経験はないが、当時の日本使節や留学生と接触があり、その知識が『日本文典』などに生かされた</p> <p>* フィッツマイアー『日本語辞書 Wörterbuch der japanischen Sprache』(一冊目 ウィーン刊)</p>	<p>家、生まれる(～1917)</p> <p>* オランダ商館長レファイスゾーン(Levijssohn, Joseph Henri)最後の江戸参府(レウィッソンとも)</p> <p>* 播磨の浜田彦蔵ら紀伊半島沖で遭難、米商船に救われてアメリカに至る</p> <p>* ロンドン、世界博覧会。世界最初の万国博覧会</p> <p>* 『ニューヨーク・タイムズ』創刊</p> <p>* 本木昌造、初めて活字を造り、自著『和蘭通弁』を印刷</p>
1852	<p>* マックファーラン(MacFarlane, Charles ?～1849)“Japan an account, geographical and historical, from the earliest period at which the islands composing this Empire were known to Europeans...”(ロンドン刊)</p> <p>* レファイスゾーン『日本雜纂 Blanden over Japan』(s'Gravenhage刊)</p>	<p>* 最後のオランダ長崎・出島商館長としてクルティウス(Curtius, Jan Hendrik Donker 1813～1879)来日(初代長崎オランダ総領事)。多数の日本文献を持ち帰り、ライデン大学の日本学の基礎を築いた。ペリー艦隊の渡来を予告した</p> <p>* 英のリビングストン、ザンベジ川探訪</p>
1853	<p style="text-align: center;">クリミア戦争 1853～1856</p>	<p>* ゴンチャロフ(Goncharov, Ivan Aleksandrovich 1812～1891)ロシアの作家、第三回遣日使節プチャーチン提督の秘書官として世界周航に加わり日本に来航、通商要求</p>
	<p>『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』紙日本関係挿絵</p>  <p style="text-align: center;">『一誠堂古書目録』より</p>	<p>* ゴシケヴィッチ (Goshkevich, Iosif Antonovich 1814～1875)プチャーチンの通訳として来日(初代ロシア箱館領事)</p> <p>* アメリカ東インド艦隊司令長官ペリー(Perry, Matthew Galbraith 1794～1858)遣日国使として軍艦4隻を率いて浦賀に来航。吉田松陰・金子重之助、密航を企てペリーに拒否される(琉球にも寄港)。この時、軍楽隊の演奏が行われる(洋楽の初め)</p> <p>* 遣日ロシア使節プチャーチン(Putiatin, Efim Vasilievitch 1803～1883)パルラダ号で長崎に来航(第3回遣日使節)し、通商を要求</p> <p>* ウィリアムズ(Williams, Samuel Wells 1812～1884)アメリカの宣教師、シナ学者。ペリー艦隊の通訳として来日</p> <p>* 『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』に日本に関するニュースが掲載され始める</p>
1854	<p>* Philaethes, (John E. Blox) “Justo Ucundono, Prince of Japan”(Baltimore刊)</p> <p>* ロニー(Rosny, Léon de 1837～1914)『口語文語日本語入門綱要』、『日本語研究序説(日本語考)』(パリ刊)。ロニーは来日経験はない。パリを訪れる日本人と接触、交遊。(この中には福沢諭吉もいる)</p>	<p>* ハイネ(Heine, Peter Bernhard Wilhelm 1827～1885)ドイツ人画家来日。ペリー遠征隊に参加</p> <p>* ペリー遠征隊に中国通訳として羅森来日。後『羅森日記』を執筆</p> <p>* 村上英俊『三語便覧』(3巻)刊(仏語、英語、蘭語三ヶ国対照辞書)</p> <p>* ベイル『蘭文英文典初歩』(長崎刊)</p> <p>* ペリー、軍艦9隻を率いて再び来航し日米和親条約調印。続いてイギリス、ロシア、オランダとも</p>

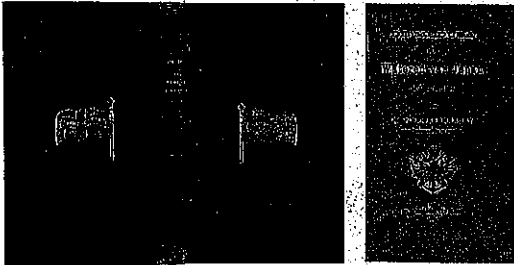
年代	日本研究の歩み	関連事項
1855	<p>*ゴンチャーフ『日本渡航記』(ペテルブルグ刊)。国境画策と通商条約調印のため我が国を訪問した時の記録。日本の事物、日本人の観察が鋭く、歴史的資料としても価値がある。初出は雑誌に連載される</p> <p>*ヒルドレス(Hildreath, Richard 1807~1865)『中世近世日欧交渉史 Japan as it was and is』(ボストン刊)。著者は来日経験がなく、主としてポルトガル・スペインの宣教師たちの手記、オランダ商館員、ロシア人探検家の著述を素材にしてまとめた一種の日本史</p> <p>*テイラー(Taylor, Bayard)『インド、中国及び日本訪問記 A visit to India, China, and Japan, in the year 1853』(ニューヨーク刊)</p>	<p>和親条約を調印(幕府、下田・箱館を開港)、琉球との修好条約を那覇で調印</p> <p>*ブチャーチン、ディアナ号で再来日。ディアナ号伊豆の戸田村で沈没(1857.58年も再来)</p> <p>*日英和親条約調印</p> <p>*琉・米修好条約調印</p> <p>*カション(Cachon, Mermet de 1828~1871?) フランス人、琉球の那覇に上陸。58年、日仏通商条約締結のため全権公使の通訳として再来日(パリ外国宣教会宣教師、駐日フランス公使館付通訳)</p> <p>*リュードルフ(Lühdorf, Fr. Aug.)ドイツの商人、アメリカ艦隊の捕船グレタ号にて箱館着</p> <p>*ベツテルハイム琉球語訳『新約聖書』(香港刊)</p> <p>*ドイツ船、初めて下田に来航</p> <p>*桂川甫周『和蘭字彙』刊(~1858)</p> <p>*日露和親条約調印</p> <p>*琉・仏和親条約調印</p> <p>*オランダ国王寄贈の軍艦スピン号、長崎に着(後の観光丸)</p> <p>*長崎海軍伝習所開設(1859年閉鎖)</p> <p>*幕府、洋学所開設</p> <p>*江戸大地震</p>
1856	<p style="text-align: center;">アロー号事件(1856~1860)</p> <p>*アセンデルフト・デ・コーニング(Assendelft de Coningh, Cornelis Theodoor van)『日本滞在記 Mijn verblijf in Japan』(アムステルダム刊)</p> <p>*ハイネ『世界周遊日本への旅 Reise um die Welt nach Japan』(全2巻)(ライプチヒ刊)。1853年、ペリー提督日本遠征隊に加わった時の記録。自ら描いた11挿絵付き</p> <p>*ホークス(Hawks, Francis Lister)編『ペリー提督日本遠征記 Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan, performed in the years 1852, 53 and 54』(全3巻 ワシントン刊)。アメリカ政府の公の報告書。ハイネによる4,000余のスケッチ付き</p>	<p>*幕府、松前藩の蝦夷地全土を直轄とする</p> <p>*ハリス(Harris, Townsend 1804~1878)アメリカ人來日(初代駐日アメリカ公使)</p> <p>*ヒュースケン(Heusken, Henricus Consadus Joannes 1832~1861)オランダ人來日(駐日アメリカ公使館付通訳)。後英語の「日記 1855~1861」が発行される</p> <p>*日蘭和親条約調印(長崎)</p> <p>*幕府、洋学所を蕃書調所と改称</p> <p>*シヤム、英国と通商条約調印</p>
1857	<p>*ボラ(Boller, Anton)『ウラルアルタイ語族に属する日本語の実証的研究 Nachweis, dass das Japanische zum ural-altaischen Stamme gehört』(Kais. Akad. d. Wissensch. Philos.-Hist. Cl. Sitzungs. Bd. 23, Wien)。日本語がウラルアルタイ語族に属することを証明した論文</p> <p>*クルティウス『日本文法試論 Proeve eener Japansche Spraak-kunst』(ライデン刊)オランダ語による日本文法書</p> <p>*ゴシクヴェイチ、橋耕斎『和魯通言比考』(ペテルブルグ刊)。日本語とロシア語の対訳辞書。約15,800語を収め、卷末に草、行、楷3体による865の常用漢字集を載せる。ロシアにおいて刊行された最初の日露辞典</p> <p>*リュードルフ『グレタ号日本通商記 Acht Monate in Japan nach Abschluss des Vertrages von Kanagawa.』(ブレーメン刊)。歴史篇、日記篇、附録の3部よりなる</p>	<p>*ベルクール(Bellecourt, P. du Chesne de)フランスの外交官、日本および中国との条約締結交渉使節に随行して来日。後、初代駐日総領事となる</p> <p>*カッテンディーケ(Kattendijke, Willem Johan Cornelis Ridder Huijssen van 1816~1866)オランダ人來日(長崎海軍伝習所教官)、勝海舟、榎本武揚らを指導</p> <p>*オズボーン(Osborn, Sherard 1822~1875)イギリスの提督、日本に来航</p> <p>*ポンペ・ファン・メーデルフォールト(Pompe van Meerdervoort, Johannes Lijdius Catharinus 1829~1908)オランダ人來日(長崎医学校)</p> <p>*インド、セボイの反乱勃発</p>

年代	日本研究の歩み	関連事項
1858	<p>*ゴンチャールーフ【旗艦・パルラダ号】(ペテルブルグ刊)。世界周航記</p> <p>*ハイン【日本・中国・オホーツク海域遠征記 Die Expedition in die Seen von China, Japan und Ochotsk unter Command von Commodore Colin Ringgold und Commodore John Rodgers..】(全3巻 ライプチヒ刊 ~59)</p> <p>*ロイペ(Leupe, Pieter Arend 1808~1884)編【フリース東北日本近海航行記 Reize van Maarten Gerritsz Vries in 1634 naar het Noorden en Oosten van Japan】(アムステルダム刊)。オランダの第二回金銀島探検船による北海道、千島列島探検。最古の北太平洋の航海図あり</p>	<p>*ブルック(Brooke, John Mercer 1826~1906)アメリカ人來日。1860年2月、太平洋を横断する我が国初の「威臨丸」の航海技術の指導をおこなった</p> <p>*エルギン(Elgin, James Bruce 1811~1863)イギリス人來日(日英修好通商航海条約締結全権)</p> <p>*オリファント(Oliphant, Laurence 1829~1888)イギリス人來日(エルギン卿随員、秘書、駐日イギリス公使館一等書記官)</p> <p>*日米修好通商条約調印</p> <p>*日仏修好通商条約調印</p> <p>*日英修好通商条約調印</p> <p>*日露修好通商条約調印</p> <p>*日蘭修好通商条約調印</p> <p>*福沢諭吉、慶応義塾の前身蘭学塾を設立</p> <p>*ジュリアン訳、玄奘【大唐西域記 Mémoires sur les contrées occidentales】刊</p> <p>*幕府、外国奉行を設置</p> <p>*清、英米露仏と天津条約調印</p> <p>*シャム、米、仏と通商条約調印</p> <p>*イギリス、インド直接統治始める</p> <p>*仏、ベトナム戦争</p>
1859	<p>*コーンウォリス(Cornwallis, Kinaham)【二度の日本 Two journeys to Japan. 1856-7】(全2巻)(ロンドン刊)。着色石版図8枚挿入</p> <p>*オリファント【エルギン卿遣日使節録 Narrative of the Earl of Elgin's mission to China and Japan in the years 1857, 58, 59】(全2巻)(エディンバラ&amp;ロンドン刊)。安政5年、日英修好通商条約締結のために來日した特派使節エルギン伯の紀行。日本の歴史、地理、国民性、生活様式や風俗などを記す。仏訳(1860)、伊訳、蘭訳あり</p> <p>*オズボーン【日本水域への航海記 A cruise in Japanese waters】(エディンバラ&amp;ロンドン刊)</p> <p>*パジェス(Pagès, Léon 1814~1886)【日本書誌 Bibliographie Japonaise ou catalogue des ouvrages relatifs ou Japon】(パリ刊)。日本に関する欧文の最初の包括的な書誌である</p> <p>*トロンソン(Tronson, J.M.)【日本・カムチャッカ・シベリア紀行 Personal narrative of a voyage to Japan, Kamtschatka, Siberia...】(ロンドン刊)</p>	<p>*オールコック(Alcock, Sir Rutherford 1809-1897)イギリス人來日(初代駐日イギリス公使)</p> <p>*ブランド(Brandt, Max August Scipio von 1835~1920)ドイツ人來日(プロイセン使節オイレンプルクの随行、領事、公使)</p> <p>*ブラウン(Brown, Samuel Robbins 1818~1880)アメリカ人來日(アメリカ・オランダ改革派教会宣教師、日本語研究、聖書翻訳)</p> <p>*グラバー(Glover, Thomas Blake 1838~1911)スコットランドの貿易商來日(長崎グラバー商会創立)</p> <p>*ヘボン(Hepburn, James Curtis 1815~1911)アメリカ人來日(長老派教会宣教師、ヘボン式ローマ字作成)</p> <p>*ホジソン(Hodgson, Christopher Pemberton 1821~1865)イギリス人來日(駐日イギリス領事館、長崎領事)植物学</p> <p>*リギンズ(Liggins, John 1829~1912)アメリカ人來日(アメリカ監督派教会宣教師、長崎英語教育)。開国後初の伝道者</p> <p>*リンダウ(Lindau, Rudolf 1829~1910)プロイセンの外交官、作家、來日(スイス通商調査派遣隊隊長)</p> <p>*シーボルト、長男アレキサンダー(Alexander von 1846~1919)を伴い再来日</p> <p>*ヴァーベック(フルベッキとも Verbeck, Guido Herman Fridolin 1830~1898)オランダ人來日(オランダ改革派教会宣教師)。御雇外国人第一号</p>

年代	日本研究の歩み	関連事項
	<p>オリファント「エルギン卿遣日使節録」</p>  <p>『一誠堂古書目録』より</p>	<p>(1869~77)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>*長崎・出島のオランダ商館閉鎖</li> <li>*スマイルズ「自助論 Self-help」刊。1870年、中村正直訳「西国立志伝」として刊行され当時のベストセラーとなる。</li> <li>*ダーウィン「種の起源」刊</li> <li>*本木昌造「和英商売対話集」刊</li> <li>*幕府、神奈川、長崎、箱館を開港し露・仏・英・蘭・米の諸国に貿易を許す(安政5ヶ国条約)</li> <li>*橋本左内、頼三樹三郎、吉田松陰ら死刑(安政の大獄)</li> <li>*長崎「グラバー商会」設立</li> <li>*ウォルシュ・ホール商会(米)開店</li> <li>*ジャーディン・マセソン商会、長崎代理店・横浜店開設</li> </ul>
1860	<ul style="list-style-type: none"> <li>*フレッシネ(Fraissinet, M. Edouard)『日本 Le Japon』(全2巻)(パリ刊)</li> <li>*カッテンディーケ「長崎海軍伝習所の日々 Uttreksel uit het dagboek van W. J. C. Ridder H. v. Kattendyke gedurende zijn verblijf in Japan in 1857, 1858 en 1859」(sGravenhage)。幕府の注文によりオランダで建造したヤーパン号(後改め威臨丸)を回航して1857年長崎着。その時の回想録</li> <li>*リギンズ「英日日常語句集 Familiar phrases in English and romanized Japanese」(上海刊)</li> <li>*スタインメッツ(Steinmetz, Andrew)『日本とその民衆 Japan and her people』(ロンドン刊)、多数の挿絵挿入</li> <li>*“Le Tour du Monde”(フランスの航海旅行週刊誌創刊)。遣日使節のアンペールやモジェスの日本滞在記が発表された</li> <li>*ラインデン伯(Lijnden, Graaf van)『日本の思い出 Souvenirs du Japon』(La Haye 刊 ~66)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*オイレンブルク(Eulenburg, Friedrich Albert Graf zu 1815~1881)プロシア人來日(東アジア全権使節)</li> <li>*この頃、浮世絵が大量に欧州に売られ、ジャポニズムの引き金となる</li> <li>*本木昌造「蛮語小引」刊</li> <li>*日葡修好通商条約調印</li> <li>*非伊直踴暗殺される(桜田門外の変)</li> <li>*威臨丸(勝海舟指揮)、軍艦奉行木村喜蔵らアメリカへ</li> <li>*遣米使節新見正興ら、条約批准書交換に出発</li> </ul>
1861	<p style="text-align: center;">米 南北戦争 1861~1865</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>*オールコック『初学者用日本文法論 Elements of Japanese grammar for the use of beginners』(上海刊)</li> <li>*ホジソン「長崎函館滞在記 A residence at Nagasaki and Hakodate in 1859~1860」(ロンドン刊)</li> <li>*ホフマン「蘭英和商用対話 Shopping dialogues in Dutch, English and Japanese」刊(自家版)</li> <li>*パージェス「日本文典 Essai de grammaire japonaise」(パリ刊)。クルティウス編「日本文法試論」(1857)の仏訳版</li> <li>*スミス(Smith, George 1815~1871)“Ten weeks in Japan”(ロンドン刊)</li> <li>*Steger, Friedrich &amp; Wagner, Hermann『日本の旅行者、もしくは開国日本 Die Nippon fahrer oder das wiedererschlossene Japan』(ライプテヒ刊)挿絵、地図挿入</li> <li>*Tilley, Henry Arthur. “Japan, The Amoor, and The Pacific”(London)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*ブレーキストン(Blakiston, Thomas Wright 1832~1891)イギリスの軍人、動物学者來日。ブレーキストン・ライン発表者</li> <li>*ラウダー(Lowder, John Frederic 1843~1902)イギリス人來日(横浜イギリス領事他、横浜税関顧問、ラングフェルト商会)</li> <li>*ニコライ(Nikolai, Petrovitch Rezanov 1836~1912)ロシア人箱館に到着(ロシア正教会大主教)</li> <li>*ウィリス(Willis, William 1837~1894)イギリス人來日(駐日イギリス公使館付医師、鹿児島医学校)</li> <li>*ワーグマン(Wirgman, Charles 1832~1891)イギリス人來日(『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』日本特派員。「ジャパン・パンチ」創刊、漫画家)</li> <li>*アメリカ領事館の通訳、ヒュースケン新殺される</li> </ul>

年代	日本研究の歩み	関連事項
1862	<p>*フォンブランク(Fonblanque, Edward Barrington de)『日本と北中国 Nippon and Pe-che-li』(ロンドン刊)。地図、挿絵挿入</p> <p>*パジェス『日仏辞典 Dictionnaire japonais-français』(パリ刊~68)。『日葡辞書』(1603)の仏訳版</p> <p>*パジェス『日本廿六聖人殉教記 Histoire des vingt-six martyrs Japonais』(パリ刊)</p> <p>*サンティレール(Saint-Hilaire, J. Barthélemy 1805~1895)『仏陀とその宗教 Le Bouddha et sa religion』(パリ、ディディエ書店刊)</p> <p>*オーストリア、ウィーン大学で非公式に日本語講座始まる</p> <p>*『シーボルト 収書図書目録 Catalogue de la bibliothèque, apportée au Japon』(長崎刊)。シーボルト収書の洋書760部(日本関係含む)と彼の日本関係の著書目録</p> <p>*ヴィシエスラフツォフ(Vysheslavtsov, Aleksei Vladimirovich)『ペンと鉛筆で書かれた世界周航記 1857~60』(ペテルブルグ刊)。1859年、安政仮条約の批准と樺太境界問題を解決するために品川沖に到来したロシア艦隊の一艦プラストゥン号に乗船していた海軍医の世界周航記。江戸の印象記あり</p> <p>「ジャパンパンチ」</p>  <p>【復刻版 ジャパンパンチ】(1) 雄松堂(1975)より</p>	<p>*日本・プロシア修好通商条約調印</p> <p>*将軍家茂、江戸・大阪の開市と兵庫・新潟の開港7年延期を仏・蘭・米・英・露に要請</p> <p>*イギリス人、ハンサード(Hansard, Albert William)『ナガサキ・ SHIPPING・リスト・アンド・アドヴァタイザー』創刊。我が国新聞の始め(同年28号で廃刊)</p> <p>*『官板バタバヤ新聞』江戸にて創刊(審書調所訳)</p> <p>*内村鑑三生まれる(~1930)</p> <p>*イギリス公使館襲撃事件(東禅寺事件)</p> <p>*イタリア王国成立</p> <p>*『ジャパン・ヘラルド』(横浜にて創刊)</p> <p>*リンカーン、アメリカ大統領に就任</p> <p>*ロシア、農奴解放令</p> <p>*モンブラン(Montblanc, Comte Ch. de 1832~1893)フランス人來日(在パリ公務弁理職、日本紹介)</p> <p>*ルサン(Roussin, Alfred 1839~1919)フランス軍艦主計補佐官來日</p> <p>*サトウ(Satow, Sir Ernest Mason 1843~1929)イギリス人來日(駐日イギリス公使官書記官、キリシタン版研究)</p> <p>*この頃)ワグマン、“The Japan Punch”横浜にて創刊。我が国最初の英文月刊風刺漫画雑誌</p> <p>*竹内保徳、松平康直、京極高朗ら遣欧使節出発(63年帰国)</p> <p>*ロンドン万国博。日本コーナーが初めて設けられ、オールコック英國公使の収集した日本の美術工芸品などが展示された。上記遣欧使節団も見学し、彼等が我が国最初の万国博見学者となる</p> <p>*イギリス人リチャードソン斬殺される(生麦事件)</p> <p>*幕府、小笠原諸島巡見のため、咸臨丸で品川出発</p> <p>*将軍徳川家茂、和宮親子内親王と婚儀(公武合体)</p> <p>*審書調所を洋書調所と改称</p> <p>*堀達之助ら編『英和対訳袖珍辞書』刊。我が国初の刊本英和辞典</p> <p>*西周、内田恒次郎、榎本武揚ら16人オランダに留学。(幕府派遣海外留学生第一号)</p> <p>*新渡戸稲造生まれる(~1933)</p> <p>*岡倉天心生まれる(~1913)</p> <p>*上野彦馬、長崎に写真館を開業</p> <p>*下岡蓮杖、横浜に写真館を開業</p> <p>*ビスマルク、プロイセン首相となる</p>

年代	日本研究の歩み	・ 関 連 事 項
1863	<p>*オールコック『大君の都—幕末日本滞在記 The capital of the Tycoon; a narrative of a three years' residence in Japan, 1859-61』(2巻 ロンドン刊)。日本の歴史、風俗、習慣、文化などについての観察。イギリスの対日政策の実際などを述べる。幕末維新史研究上必読の文献。地図2枚、ワグマンの挿絵・駒絵やオールコック自身が写生したもの144点付き</p> <p>*オールコック『日用日本語対話集 Familiar Japanese dialogues in katakana and Roman characters with French and English translation』(ロンドン刊)</p> <p>*ブラウン『英和俗語会話集 A colloquial Japanese』(上海刊)</p> <p>*カシヨ『アイヌ・起源、言語、風俗、宗教 Les Aïnos: origine, langue, mœurs, religion』(パリ刊)。フランス人最初のアイヌ探訪記</p> <p>*フォーチュン(Fortune, Robert 1813-1880)『江戸と北京 Yedo and Peking; a narrative of a journey to the capitals of Japan and China』(ロンドン刊)。イギリスの園芸学者が2首都を中心に植物採集旅行をしたときの見聞記</p> <p>*フランス国立東洋語学校に日本語講座開設。レオン・ド・ロニー最初の日本語教授となる。独学によって日本語、日本学を研究する。滞日経験はないが、幕府の遣欧使節の通訳にあたり、福沢諭吉らと親交を結ぶ</p> <p>*ロニー『日本文集 Recueil de textes japonais』(パリ刊)</p> <p>*ヴェルナー(Werner, Reinhold von 1825-1909)『エルベ号艦長幕末記 Die preussische Expedition nach China, Japan und Siam』プロイセン使節オイレンブルクに随って来日した時の訪問記</p>	<p>*ブラック(Black, John Reddie 1827-1880)イギリス人來日。『日新真事誌』、『ファー・イースト』刊</p> <p>*ジョセフ・ヒコ(浜田彦藏)『漂流記』(2冊刊)</p> <p>*サマーズ(Summers, James 1828-1891)“Chinese and Japanese Repository”(月刊誌)創刊(~1865廃刊)</p> <p>*“The Daily Japan Herald”初の日刊新聞創刊(横浜)</p> <p>*キューパー提督の英国艦隊鹿児島砲撃(薩英戦争)</p> <p>*池田長発(1837-1879)遣仏使節横浜を出帆(~64)</p> <p>*長州藩士、井上馨、伊藤博文ら国禁を犯して英国へ</p> <p>*リンカーン奴隸解放宣言</p> <p>*洋書調所を開成所と改称</p> <p>*長崎のグラバー邸成る</p>
1864	<p>*オイレンブルク『東アジア遠征記 Die preussische Expedition nach Ost-Asien』(全4巻 ベルリン刊 ~73)。公式史料によるプロイセン艦隊の東アジア遠征記。日本の記述あり</p> <p>*リンダウ『日本周遊紀行 Un voyage autour du Japon』(パリ、アシエット社刊)</p> <p>*“Die preussische Expedition nach Ost-Asien. Ansichten aus Japan, China, und Siam.”(10分冊)(ベルリン刊 ~72)。隊員として参加したハイネ、およびベルク(Berg, A)によるスケッチに基づいたものといわれる</p> <p>*サマーズ『日本語と文法 Japanese language and grammar』(『シナ・日本両語彙録第二巻』)(ロンドン刊)</p> <p>*シュピース(Spiess, Gustav)『シュピースのプロシア日本遠征記 Die preussische Expedition nach Ostasien während der Jahre 1860-1862』(ベルリン&amp;ライプツヒ刊)。ザクセン商業会議所派遣の記録(オイレンブルクの一行)</p>	<p>*アストン(Aston, William George 1841-1911)イギリス人來日(駐日イギリス公使館書記、日本語研究)</p> <p>*アンペール(Humbert, Aimé 1819-1900)スイス人來日(スイス遣日使節)</p> <p>*ロッシュ(Roches, Léon 1809-1901)フランス人來日(駐日フランス公使)</p> <p>*日本・スイス修好通商条約調印</p> <p>*4国連合艦隊(英仏米蘭)、下関砲撃</p> <p>*ジョセフ・ヒコ(浜田彦藏)『新聞誌』創刊。翌慶応元年『海外新聞』と改題。我が国最初の新聞(慶応2年末まで)</p> <p>*津田梅子生まれる(~1929)</p> <p>*新島襄、アメリカへ向け箱館を出発</p> <p>*第一インターナショナル(~1876)</p>
1865	<p>*カセンブroot(Casembroot, F. de)『メデューサ号幕末日本沿岸航海記 De Medusa in de Wateren van Japan, in 1863 en 1864』(s'Gravenhage刊)5枚折り込み地図付き</p> <p>*モンブラン『日本事情 Le Japon』(パリ刊 ~67)。当時もっとも正確で、詳細な日本研究として高く評価され、多くの読者を獲得した</p> <p>*Pauthier, Jean Pierre Guillaume. “Le livre de Marco Polo, citoyen de Venise conseiller privé et commissaire impérial de Khoubilai-Khaân.”(全2巻)(パリ刊)</p> <p>*ロニー『和法会話対話Guide de la conversation japonaise,</p>	<p>*パークス(Parkes, Sir Harry Smith 1828-1885)イギリス人來日(駐日イギリス公使)</p> <p>*シュリーマン(Schliemann, Heinrich 1822-1890)ドイツ人、トロイア発掘者、世界周航の途中国に立ち寄る</p> <p>*サヴァティエ(Savatier, Paul Amédée Ludovic 1830-1891)フランス人來日。横須賀造船所医師、日本産植物研究</p> <p>*ヴェルニー(Verny, Francis Léon 1837-1908)</p>

年代	日本研究の歩み	関連事項
	<p>précède d'une introduction sur la prononciation en usage, à Yédo】(パリ刊) カセンプロート『メデュサ号幕末日本沿岸航海記』</p>  <p>【一誠堂古書目録】より</p>	<p>フランス人來日。横須賀造船所設置の立案、経営、建設 *横須賀製鉄所の起工式 *幕府、柴田剛中ら7名をフランス、イギリスに派遣(軍制調査のため) *幕府、市川文吉ら6名をロシアへ留学さす(最初のロシア留学) *薩摩藩主、町田久成、寺島宗則以下16名イギリスに派遣 *浦上天主堂竣工 *リンカーン暗殺される *『ジャパントゥイズ』横浜にて創刊。週刊英字新聞(～1877) *ジョセフ・ヒコ、岸田吟香と『海外新聞』発刊(～66年24号)</p>
1866	<p>*カシヨン『仏英和辞典 Dictionnaire français - anglais - japonais』(上巻刊)。下巻は未完成に終わる *ディキンズ(Dickins, F.V.)訳“Hyaku Nin Isshiu”(『百人一首』)(ロンドン刊) *ルサン『日本沿岸の戦闘 Une campagne sur les côtes du Japon』(パリ・アシェット社刊)</p>	<p>*アルミニオン(Arminjon, V.F. 1830～1897)イタリヤ人來日(海軍軍人イタリヤ全権使節) *ミットフォード(Mitford, Algernon Bertram Freeman-M., 1st Baron Redesdale 1837～1916)イギリス人來日(駐日イギリス公使官付書記官。日本紹介) *スエenson(Suenson, Edouard 1842～1921)デンマーク人來日(フランス海軍士官) *徳川慶喜(1837～1913)、第15代将軍に就任 *シーボルト没 *日伊修好通商条約調印 *日本・ベルギー修好通商条約調印 *幕府、遣露使節小出秀実ら出発 *幕府派遣の英国留学生、中村正直ら12人横浜出発 *福沢諭吉『西洋事情』刊(～1869) *幕府、學術修業・貿易のための海外渡航を許可</p>
1867	<p>*ベッテルハイム編『英琉辞典 English-Loochooan dictionary』(稿本) *ヘボン『和英語林集成 A Japanese and English dictionary ; with an English and Japanese index』(上海刊)。後進の宣教師の日本語学習のために約8年を費やして編さんした和英・英和辞書。ヘボン式ローマ字綴りを生んだ。1910年までに9版が出た *ホフマン『日本文典 Japansche Spraakleer』(ライデン刊)。蘭訳版、独訳版は1877年発行 *ホフマン『日本文典 A Japanese grammar』(ライデン刊)。英訳版 *ラウダー『日英会話 Conversation in Japanese and English』(ロンドン刊) *モンブラン『ありのままの日本 Le Japon tel qu'il est』(パリ・アルティス・バルトラン社刊) *ポンペ・ファン・メーデルフォールト『ポンペ日本滞在見聞記ー日本における5年間 Vijf Jaren in Japan 1857～1863』(ライデン</p>	<p>*ボーヴォワール伯(Beauvoir, Comte de Ludovic 1846～?)世界一周旅行の途中、横浜に入港 *ブリンクレー(Brinkley, Francis 1841～1912)イギリス人來日(『ジャパントゥイズ』刊、教育) *睦仁親王(明治天皇)踐祚 *日本・デンマーク修好通商条約調印 *オーストリア・ハンガリー帝国成立 *通欧使節、徳川昭武出発 *マルクス『資本論』第1巻刊 *英人ベアリー『万国新聞紙』横浜にて創刊 *パリ万国博覧会に日本初参加。浮世絵その他の日本美術品が出品される(幕府、薩摩、佐賀藩も出品) *『ジャパントゥイズ』我が国最初の夕刊専門の英字新聞、横浜にて創刊(～1923) *兵庫開港</p>



年代	日本研究の歩み	関連事項
	<p>刊 ~68)。オランダ海軍の軍医であった著者が1857年から1862年まで長崎に滞在して帰国後、往時を回想して著した。当時の社会、文化、風俗、歴史、政治、外交などの諸問題についての興味ある記述に富んでいる</p> <p>*シュリーマン「日本中国旅行記 La Chine at le Japon au temps présent」(パリ刊)</p> <p>*シルバー(Silver, Jacob Mortimer Wier)「日本人の風俗習慣画譜 Sketches of Japanese manners and customs」(ロンドン刊)</p>	<p>*大坂開市</p> <p>*江戸幕府滅亡(大政奉還、王政復古の号令)</p> <p>*アメリカ、ロシアよりアラスカを購入</p> <p>*サンフランシスコ-香港間の航路開設</p>

### 〈一般参考文献〉(発行年代順)

- \* Pagès, Léon. *Bibliographie japonaise, ou catalogue des ouvrages relatifs au Japon qui ont été publiés depuis le XVe siècle jusqu'à nos jours*. Paris: Benjamin Dupart, 1859. 68p.
  - \* Wenckstern, Friedrich von. *A bibliography of the Japanese Empire ; being a classified list of all books, essays and maps in European languages relating to Dai Nihon (Great Japan) published in Europe, America and in the East from 1859~93 A. D.* Leiden : E. J. Brill, 1895. 338p.
  - \* Cordier, Henri. *Bibliotheca japonica ; dictionnaire bibliographique des ouvrages relatifs à l'Empire japonais, rangés par ordre chronologique jusqu'à 1870*. Paris : Imprimerie Nationale, 1912. 762p.
  - \* Streit, Robert. *Bibliotheca missionum, 4. Bd., 5. Bd., 6. Bd., 10. Bd.* Münster i. w. : Verlag der Aschendorffschen Buchhandlung, 1916.
- 

- \* 大槻如電原著 佐藤栄七増訂 日本洋学編年史 錦正社 1927 (再版 1965)
  - \* 柄内曾次郎編 増修洋人日本探検年表 岩波書店 1929 (初版1909)
  - \* 青木利三郎編 対外交渉史譜 巖松堂 1945
  - \* 木宮泰彦 日華通交年表 (富山房『日華文化交渉史』1955)
  - \* 奈良本辰也ほか編 日本歴史大辞典 別巻：日本歴史年表 河出書房新社 1960
  - \* 外務省編 日本外交年表並主要文書 上・下 原書房 1965~1966
  - \* 森克己 日中交渉史年表 (人物往来社『読史総覧』1966)
  - \* 田村洋幸 日鮮交渉史年表 (人物往来社『読史総覧』1966)
  - \* 田中梅吉 総合詳説日独言語文化交流史大年表 三修社 1968
  - \* 日本学術振興会編・刊 海外における日本研究 1969
  - \* 鹿島平和研究所編 日本外交史 別巻3：年表 鹿島研究所出版会 1974
  - \* 外務省情報文化局編 国際主要事項年表 1945~1975 外交時報社 1976
  - \* 森睦彦 海外交渉史略年表 (日本書籍『海外交渉史の視点』第2巻 近世 1976 付録)
  - \* 日本語教育学会編 日本語教育年表 (大修館『日本語教育事典』1982 付録3)
  - \* 武内博編 来日西洋人名事典 日外アソシエーツ 1983
  - \* 岩波書店編 近代日本総合年表 第2版 岩波書店 1984
  - \* 日蘭学会編 洋学史事典 雄松堂出版 1984
  - \* 熊沢清次、斎藤修一 年表・世界史の中の日本語 (『国際交流』41号 1986)
  - \* 伊藤俊太郎ほか 世界から見た日本小事典 エッソ石油株式会社広報部 1988
  - \* 杉本つとむ 西洋人の日本語発見略年表 (創拓社『西洋人の日本語発見一外国人の日本語研究史 1549~1868』1989)
  - \* 富田仁編 海外交流史事典 日外アソシエーツ 1989
  - \* 岩波書店編 日本文化総合年表 岩波書店 1990
  - \* 松岡正剛監修 情報の歴史 NTT出版 1990
  - \* 文学年表・中国文学年表 (小学館『国語国文学手帖』尚学図書編 1990)
  - \* 岩波書店編集部 近代日本総合年表 第3版 岩波書店 1991.2
- 

### 〈項目参考文献〉(発行年代順)

- \* 渡辺修二郎 世界ニ於ケル日本人 経済雑誌社 1893 付録：世界形勢通覽表記「建治元年(1275)~明治26(1893)」
- \* 端溪周鳳編著 善隣国宝記 上中下巻 文明2年(1470)成立 明暦3年(1657)刊 (『改訂 史籍集覧：21』近藤活版所 1901)
- \* 松下秀明 異称日本伝 上中下巻 元禄6年(1693)刊 (『改訂 史籍集覧：20』近藤活版所 1901)
- \* 岩生成一 近世初期の対外関係 岩波書店 1934 (岩波講座『日本歴史』15巻3)
- \* 秋山謙蔵 日支交渉史話 内外書籍会社 1935
- \* ベルリ提督日本遠征記(上下) 土屋喬雄 玉城肇訳 弘文荘 1935 (岩波文庫版 4冊 1948~1955)

- \*岡本良知 十六世紀日欧交通史の研究 弘文荘 1936 (増補 六甲書房 1942)
- \*武藤長蔵 日英交通史の研究 内外出版印刷 1937 (増補再版 1941 同朋舎復刊 1978)
- \*秋山謙蔵 日支交渉史研究 岩波書店 1939
- \*岩村忍 十三世紀東西交渉史序説 三省堂 1939 (再版 1942)
- \*ベルリン日本研究所 京都ドイツ文化研究所編 古日本文献目録 (*Bibliographischer Alt-Japan Katalog, 1542~1853*) 京都ドイツ文化研究所 1940
- \*オイレンブルグ著 日独文化協会訳・刊 第1回独逸遣日使節日本滞在記 1940
- \*Laures, Johannes. *Kirishitan Bunko : a manual of books and documents on the early Christian mission in Japan.* Sophia University, 1940.(rev. ed., 1941, 1957)
- \*ゴンチャロフ著 井上満訳 日本渡航記—フレガート「バルラダ」号より 岩波書店 1941 (岩波文庫)
- \*日伊協会編・刊 日伊文化交渉史 1941
- \*幸田成友 日欧通交史 岩波書店 1942
- \*フォン・プラント著 日独文化協会訳 黎明日本 刀江書院 1942
- \*ゴロウニン著 井上満訳 日本幽囚記(全3冊) 岩波書店 1943~1946 (岩波文庫)
- \*田保橋潔 増訂近代日本外国関係史 刀江書院 1943 (第1版 1930)
- \*秋山謙蔵 東亞交渉史論 第一書房 1944
- \*牧健二 西洋人の見た日本史 弘文堂 1949
- \*ハリス日本滞在記(全3冊) 坂田精一訳 岩波書店 1953~1954 (岩波文庫)
- \*国立国会図書館編・刊 外国人の日本研究—資料展示会目録と解説 1954
- \*天理図書館編 西洋古版日本地図集 天理大学出版部 1954
- \*ナホッド、オスカー著 富永牧太訳 十七世紀日蘭交渉史 天理大学出版部 1956(原著1897) (天理図書館参考資料:5)
- \*天理図書館編 泰西日本記集 天理大学出版部 1957
- \*東洋文庫 *A classified catalogue of books on the section XVII. Japan in the Toyo Bunko acquired during the years 1917~1956.* 1957
- \*板沢武雄 日蘭文化交渉史の研究 吉川弘文館 1959
- \*田中健夫 中世海外交渉史の研究 東京大学出版会 1959 (東大人文学研究叢書)
- \*オールコック著 山口光朔訳 大君の都:幕末日本滞在記(全3冊) 岩波書店 1962 (岩波文庫)
- \*チースリク編 北方探検記—元和年間に於ける外国人の蝦夷報告書 吉川弘文館 1962
- \*フロイス、ルイス著 柳谷武夫訳 日本史—キリシタン伝来のころ(全5巻) 平凡社1963~1978 (東洋文庫:4,35,65,164,330)
- \*カッテンディーケ著 水田信利訳 長崎海軍伝習所の日々 平凡社 1964 (東洋文庫:26)
- \*大航海時代叢書 岩波書店 1965~70
  - 第8 東方案内記
  - 第9,10 ジョアン ロドリゲス 日本教会史 上・下
  - 第11 日本王国記 日欧文化比較
- \*国際文化振興会図書室 *A classified list of books in Western languages relating to Japan, acquired by the K. B. S. Library during the years 1935~1962.* 国際文化振興会 1965
- \*中村栄孝 日朝関係史の研究 上・中・下 吉川弘文館 1965,1969
- \*日本古地図—西洋古版に現われた 天理ギャラリー 1965
- \*クロウ、カール著 田坂長次郎訳 ハリス伝—日本の扉を開いた男 平凡社 1966 (東洋文庫:61)
- \*国立国会図書館参考書誌部編・刊 国立国会図書館所蔵日本関係欧文図書目録(支部上野図書館旧蔵分) 1966
- \*サンソム、G. S.著 金井園他訳 西欧世界と日本(上下巻) 筑摩書房 1966 (筑摩叢書:53~54)
- \*田辺太一著 坂田精一訳・校注 幕末外交談 全2巻 平凡社 1966 (東洋文庫:69,72) \*2巻に「幕末外交略年表」あり
- \*カロン、フランソワ原著 幸田成友訳著 日本大王国志 平凡社 1967 (東洋文庫:90)
- \*国際文化会館図書室編・刊 *Union catalog of books on Japan in Western languages.* Ed. by Naomi Fukuda. International House Library, 1967
- \*呉秀三著 岩生成一解説 シーボルト先生—その生涯及び功業(全3巻) 平凡社 1967~1968 (東洋文庫:103,115,117)
- \*シーボルト著 斎藤信訳 江戸参府紀行 平凡社 1967 (東洋文庫:87)

- \* 芳賀徹著 大君の使節—幕末日本人の西欧体験 中央公論社 1968 (中公新書:163)
- \* ハメル、ヘンドリック著 生田滋訳 朝鮮幽囚記 平凡社 1969 (東洋文庫:132)
- \* ベニョフスキー著 水口志計夫 沼田次郎編訳 ベニョフスキー航海記 平凡社 1970 (東洋文庫:160)
- \* ブラック著 ねずまさし 小池晴子訳 ヤング・ジャパン—横浜と江戸(全3巻) 平凡社 1970 (東洋文庫:156、166、176)
- \* 今宮新 初期日独通交史の研究 鹿島出版会 1971
- \* マルコ・ポーロ 愛宕松男訳注 東方見聞録(全2巻) 平凡社 1971 (東洋文庫:158、183)
- \* 中井昌夫 初期日本=スイス関係史 風間書房 1971
- \* 沼田次郎編 日本と西洋 平凡社 1971 (東西文明の交流:6)
- \* 高野明 日本とロシア 両国交渉の源流 紀伊國屋書店 1971
- \* 京都外国語大学図書館編・刊 *Nipponalia ; books on Japan in European languages in the Library of Kyoto University of Foreign Studies.* 1972
- \* 天理図書館善本叢書洋書の部 クラシカ・ヤポニカ 1972~77
  - 第一次 語学篇
  - 第二次 きりしたん資料篇 1
  - 第三次 東西交渉史篇 1
  - 第四次 東西交渉史篇 2
  - 第五次 語学篇 2
  - 第七次 東西交渉史篇 3
  - 第九次 ヴァリア篇 1
  - 第十次 ヴァリア篇 2
  - 第十一次 ヴァリア篇 3
- \* 京都外国語大学付属図書館編・刊 日本関係資料図録 1973
- \* ヴァリニャーノ 松田毅一他訳 日本巡察記 平凡社 1973 (東洋文庫:229)
- \* 鎖国と西洋 天理ギャラリー 1974
- \* 申維翰著 姜在彦訳注 海游録 平凡社 1974 (東洋文庫:252)
- \* 信夫清三郎編 日本外交史・1、2(1853~1972) 毎日新聞社 1974
- \* 石原道博著 訳註中国正史日本伝 国書刊行会 1975
- \* 森克己ほか編 海外交渉史の視点 1、2巻 日本書籍 1975~1976
- \* 天理図書館編 泰西日本記集 2 天理大学出版部 1975
- \* ヴァレニウス、ベルンハルドゥス 宮内芳明訳 日本伝聞記 文明堂 1975
- \* 日本英学史学会編 英語事始 日本ブリタニカ 1976
- \* 国立国会図書館編 国立国会図書館所蔵日本関係欧文図書目録 昭和23年—50年 1977
- \* 京都外国語大学付属図書館編 対外交渉史文献目録 近世篇 雄松堂書店 1977
- \* 京都外国語大学付属図書館編・刊 図録西洋との出会い—日本人の見た外国・外国人の見た日本 1977
- \* ケンペル著 斎藤信訳 江戸参府旅行日記 平凡社 1977 (東洋文庫:303)
- \* 同志社大学図書館編・刊 ケーリ文庫目録 1978
- \* フィッセル著 庄司三男 沼田次郎訳 日本風俗備考(全2巻) 平凡社 1978 (東洋文庫:326、341)
- \* 新異国叢書 雄松堂書店 1978~79
  - 1~2 イエズス会士日本通信(上下)
  - 3~4 イエズス会士日本年報(上下)
  - 5 デ・サンデ天正遣欧使節記
  - 6 セーリス日本渡航記 ヴィルマン日本滞在記
  - 7 ティチング日本風俗図誌
  - 8 ペリー日本遠征随行記
  - 9 エルギン卿遣日使節録
  - 10 ポンペ日本滞在看聞記—日本における五年間
  - 11 ゴンチャロフ日本渡航記
  - 12~13 オイレンブルク日本遠征記(上下)
  - 14~15 アンベール幕末日本図絵(上下)
- \* 吉田光邦 両洋の眼—幕末明治の文化接触 朝日新聞社 1978

- \*ズナメンスキー、S. 秋月俊幸訳 ロシア人の日本発見—北太平洋における航海と地図の歴史 北海道大学図書刊行会 1979
- \*国史大辞典編集委員会編 国史大辞典 1～ 吉川弘文館 1979～
- \*マウンジー著 安岡昭男補注 薩摩反乱記 平凡社 1979 (東洋文庫:350)
- \*マクドナルド、ラナルド ルイス、ウィリアム、村上直次郎編 富田虎男訳訂 日本回想記—インディアンの見た幕末の日本 刀水書房 1979
- \*ニコライ著 中村健之介訳 ニコライの見た幕末日本 講談社 1979 (講談社学術文庫)
- \*大南勝彦 ペテルブルグからの黒船 角川書店 1979
- \*ピント、メンデス著 岡村多希子訳 東洋遍歴記(全3巻) 平凡社 1979～1980 (東洋文庫:366、371、373)
- \*柳成竜 朴鍾鳴訳注 懲惑録 平凡社 1979 (東洋文庫:357)
- \*富田仁 メルメ・カション—幕末フランス怪僧伝 有隣堂 1979
- \*京都外国語大学図書館編・刊 *Nipponalia. Supplement.* 1980
- \*佐治芳雄編 邦訳日本研究文献解題 宗高書房 1980
- \*山脇悌二郎 長崎のオランダ商館 世界の中の鎖国日本 中央公論社 1980 (中公新書:579)
- \*大航海時代叢書 第2期 岩波書店 1981、1988  
6、7 イエズス会と日本 1、2
- \*ヒルドレス著 北村勇訳 中世近世日欧交渉史(全2巻) 現代思潮社 1981 (古典文庫:61、63)
- \*三国交流誌 三一書房 1981 (日本庶民生活資料集成:27)  
老松堂日本行録 海東諸国記 日本往還日記 看羊録 海游録 朝鮮来聘 宝曆物語  
使琉球雑録 中山伝信録 李朝夷録抄
- \*ジーボルト、A. 著 斎藤信訳 ジーボルト最後の日本旅行 平凡社 1981 (東洋文庫:398)
- \*ハーレン、ファン 井田清子訳 日本論—日本キリシタンとオランダ 筑摩書房 1982
- \*田中健夫 対外関係と文化交流 思文閣 1982 (思文閣史学叢書)
- \*松田毅一、E. ヨリッセン著 フロイスの日本覚書—日本とヨーロッパの風習の違い 中央公論社 1983 (中公新書:707)
- \* *Kodansha encyclopedia of Japan, vol. 1~9, supplement.* 1983~1986
- \*新異国叢書 雄松堂 1983~85  
第2輯1 ベリー—日本遠征日記  
第2輯2 ハイネ世界周航日本への旅  
第2輯3 グレタ号日本通商記  
第2輯4 ホジソン長崎函館滞在記  
第2輯6 シュリーマン日本中国旅行記 パンベリー—日本踏査紀行
- \*ボーヴォワール、L. ド・著 綾部友治郎訳 ジャボン1867年 有隣堂 1984 (有隣堂新書:27)
- \*ディキンズ著 高梨健吉訳 パークス伝—日本駐在の日々 平凡社 1984 (東洋文庫:429)
- \*姜沆 朴鍾鳴訳注 看羊録 平凡社 1984 (東洋文庫:440)
- \*京都外国語大学図書館編・刊 *Nipponalia. Supplement 2.* 1984
- \*日伊協会編 幕末・明治期における日伊交流 日本放送出版協会 1984
- \*日蘭学会編 洋学関係研究文献要覧 1868~1982 日外アソシエーツ 1984 (20世紀文献要覧体系:17)
- \*石原道博編訳 新訂魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝—中国正史日本伝(1) 岩波書店 1985 (岩波文庫)
- \*ミットフォード、A. B. 著 長岡祥三訳 英国外交官の見た幕末維新 新人物往来社 1985
- \*宮永孝 ポンペー—日本近代医学の父 筑摩書房 1985
- \*渡辺三男 新修註日本考 新典社 1985 (新典社叢書:13) \*初版は大東出版社 1943
- \*相原良一著 日欧交渉史考—マルコ・ポーロから平戸商館まで 南雲堂 1986
- \*石原道博編訳 新訂旧唐書倭国日本伝・宋史日本伝・元史日本伝—中国正史日本伝(2) 岩波書店 1986 (岩波文庫)
- \*三宅英利 近世日朝関係史の研究 文献出版 1986
- \*長崎・出島展[図録] 梅田大丸ミュージアム 1986
- \*大森盛太郎 日本の洋学 ベリー来航から130年間の歴史ドキュメント (全2巻) 新門出版社 1986
- \*Watanabe Hiroshi 編 マルコ・ポーロ書誌 1477~1983 東洋文庫 1986
- \*ホール、ベイジル 春名徹訳 朝鮮・琉球航海記—1816年アマースト使節団とともに 岩波書店 1986

(岩波文庫)

- \*金井圓 日蘭交渉史の研究 思文閣 1986
- \*リングウ、ルドルフ著 森本英夫訳 スイス領事の見た幕末日本 新人物往来社 1986
- \*横山俊夫 京都大学人文科学研究所蔵日本関係欧文図書総覧—1950年以前刊行分 京都大学人文科学研究所 1986
- \*アルミニオン、V. F.著 大久保昭男訳 イタリア使節の幕末見聞記 新人物往来社 1987(1943年 三学書房の松崎実編、田沼利男訳 伊国使節アルミニオン幕末日本記 あり)
- \*浅岡邦雄 ヘンリーJ. ブラックの来日時期 (『快樂亭ブラック研究』2、1987)
- \*ボードゥアン、A.著 フォス美弥子訳 オランダ領事の幕末維新 新人物往来社 1987
- \*モンブラン、C.他著 森本英夫訳 モンブランの日本見聞記—フランス人の幕末明治観 新人物往来社 1987
- \*ルサン、アルフレッド 樋口裕一訳 フランス士官の下関海戦記 新人物往来社 1987
- \*佐伯彰一 芳賀徹編 外国人による日本論の名著—ゴンチャロフからパンゲまで 中央公論社 1987 (中公新書：832)
- \*宋希璋 村井章介校注 老松堂日本行録—朝鮮使節の見た中世日本 岩波書店 1987 (岩波文庫)
- \*吉村善太郎編著 碧眼日本民俗図絵 雄松堂 1987
- \*京都国立博物館 東京国立博物館 朝日新聞社編 シーボルトと日本—日本・オランダ修好380年記念 (図録) 朝日新聞社 1988
- \*宮沢真一編著 英国人が見た幕末薩摩 高城書房 1988
- \*佐伯有清編訳 三国史記倭人伝他六篇—朝鮮正史日本伝(1) 岩波書店 1988 (岩波文庫)
- \*篠原宏著 日本海軍お雇い外人—幕末から日露戦争まで 中央公論社 1988 (中公新書：893)
- \*天理大学附属天理図書館編 朝鮮通信使と江戸時代の人々 天理大学出版部 1988
- \*武安隆 熊達雲 中国人の日本研究史 六興出版 1989 (東アジアのなかの日本歴史：12)
- \*張玉祥 織豊政権と東アジア 六興出版 1989 (東アジアのなかの日本歴史：3)
- \*ヒューズケン日本日記 青木枝朗訳 岩波書店 1989 (岩波文庫)
- \*上垣外憲一著 雨森芳洲—元禄享保の国際人 中央公論社 1989 (中公新書：945)
- \*近畿大学中央図書館蔵稀書室編 日本・西欧の名著—近畿大学中央図書館蔵稀書展 近畿大学中央図書館 1989
- \*岸野久 西欧人の日本発見—ザビエル来日前日本情報の研究 吉川弘文館 1989
- \*国立国会図書館 世界の見た日本—国立国会図書館所蔵日本関係翻訳図書目録 紀伊国屋書店発売 1989
- \*スエンソン、E.著 長島要一訳 江戸幕末滞在記 新人物往来社 1989
- \*浅岡邦雄 『日新真事誌』の創刊者ジョン・レディ・ブラック (『参考書誌研究』37、1990)
- \*沈仁安 倭国と東アジア 六興出版 1990 (東アジアのなかの日本歴史：1)
- \*近畿大学中央図書館編・刊 中央図書館蔵稀書展観目録 1990
- \*ヴィシエスラフツォフ著 長島要一訳 ロシア艦隊幕末来訪記 新人物往来社 1990
- \*ヴェルナー、R 著 金森誠也・安藤勉訳 エルベ号艦長幕末記 新人物往来社 1990.7
- \*藤井哲博著 長崎海軍伝習所 十九世紀東西文化の接点 中央公論社 1991 (中公新書：1024)
- \*クーパー、マイケル著 松本たま訳 通辞ロドリゲス 原書房 1991
- \*国立民族学博物館、ドイツ—日本研究所編・発行 ケンペル展—ドイツ人の見た元禄時代 1991

江戸参府の折りの  
馬上のケンペル



国立民族学博物館 ケンペル展(1991)のスタンプより